



Volunteer Center

明 治 学 院 大 学
ボランティアセンター報告書
第19号

VOLUNTEER CENTER YEAR-END REPORT
2022

明 治 学 院 大 学 ボ ラ ン テ ィ ア セ ン タ ー
MEIJIGAKUIN UNIVERSITY VOLUNTEER CENTER

目 次

明治学院大学 ボランティアセンター報告書 第19号 2022

学長挨拶	村田 玲音	1
ボランティアセンター長挨拶	猪瀬 浩平	3

I. 特集

ボランティアセンターギャラリー ～対面活動の再開～	9
---------------------------	---

II. 2022 年度活動報告

1. 2022 年度ボランティアセンター行事一覧	13
2. 2022 年度来室者数	14

<全学プログラム>

3. ボランティア大賞	15
総括	15
受賞学生報告	
優秀賞「本質と敬意の重要性を学び具現化した私の学生生活」	
社会学部社会福祉学科4年/安居院 桃子	17
審査員特別賞「労働者とボランティアの関係から見る～ボランティアに法律は必要か否か」	
法学部消費情報環境法学科4年/小澤 隼也	19
奨励賞「子供たちの成長に貢献できた2022年」	
国際学部国際学科3年/杉田 愛衣子	21
4. 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム	23
総括	23
修了学生報告	
「資本主義社会での持続可能なボランティア実践」 法学部消費情報環境法学科4年/塙 彩香	27
「外国人に日本語を教えるということ」 法学部消費情報環境法学科4年/三河 眞弓	29
「ノートテイクを通じた障がい理解と今後の課題」 文学部英文学科3年/木村 なつみ	31
「まちと学生のつながり探し」 社会学部社会福祉学科3年/高久 綾花	33

<ボランティアセンター主催プログラム>

5. ボランティアファンド学生チャレンジ	35
総括/助成団体活動報告	
教育格差是正キャンペーン	37
生理用品プロジェクト	39
平和の想いを伝えるバラと桜を明学に！～核兵器を知る、考える、伝える、きっかけに～	41
足元から「食」を考える	43

6. いつでもボランティアチャレンジ	46
総括／採用プロジェクト活動報告	
初心者歓迎！サッカー教室.....	48
MGCloset Exhibition.....	49
明学で「主戦場」を上映しよう.....	51
MG RAINBOW PRIDE	54
Piece of Nature	55
金山中学校との対面交流.....	56
N・E・O フェス Kawaii 華道体験レッスン.....	58
画面を通してではなく直接の交流を！～ OPENROOM 岐阜訪問～	59
多文化共生スポット ワールドキッズ クリスマス会.....	60
GOCA CAFE 日本語で話そう	62
7. 1 Day for Others	64
総括.....	64
1 Day for Others 2022 参加者数/これまでの参加者数とプログラム数.....	65
8. ボランティア・カフェ	69
総括.....	69
各回報告.....	70
9. 国際機関実務体験プログラム	77
総括.....	77
派遣学生活動報告.....	78

Ⅲ. 新入生アンケート

新入生のボランティア意識とセンターの課題 - 「2022 年度新入生ボランティア活動アンケート」 ...	83
--	----

Ⅳ. ボランティアセンター資料

1. ボランティアセンターの活動にご協力くださった皆さま	91
2. 2022 年度マスコミ報道一覧	91
3. 2022 年度各種委員等一覧	92
4. ボランティアセンター 2022 年度基本方針.....	93
5. 明治学院大学ボランティアセンター規程	95

学長挨拶

学長 村田 玲音

2020 年春から世界的に広がった新型コロナウイルス感染症は、ようやく昨年春から落ち着きを見せ始めました。明治学院大学でも 2022 年 5 月の連休明けからほとんどすべての授業が対面で行なわれ、課外活動も順次制限が撤廃されていきました。これを待っていたかのように学生みなさんが一斉に大学に出てきて、キャンパスが学生の姿で一杯になったのは記憶に新しいところです。コロナ後の 2022 年度はコロナ前の 2019 年度と比べて、登校者数も多く、出席率も学期末までほとんど落ちることがありませんでした。キャンパスにおける実際の学生生活の楽しさを、みなさんが改めて認識したのでしょう。

社会はどうやらコロナを克服しつつあるように見えます。色々なことが急速に元に戻り始めています。その一方で社会はコロナをくぐり抜けた今、コロナ禍の置き土産として私達の手元に何が残ったのか、これを真剣に考え始めています。そして良いものはコロナ後の社会に取り入れていこうと積極的に動き始めています。

コロナ禍をくぐりぬけて私たちが痛感したのは、なんと言っても、人と人が実際に対面してコミュニケーションを取り合うことの貴重さ、かけがえのなさ、そして楽しさでしょう。同時に、コロナ時代を切り抜けるために不可欠だった、インターネットをはじめとするコミュニケーション技術、これがいかに便利で重要なものであるかも、世界中がしっかり理解しました。今後は「対面による直接的なコミュニケーションの重要性」と「情報技術によるコミュニケーションの利便性」、これをどう組み合わせれば、より効果的な制度ができるのか、工夫や試行錯誤が社会や大学の色々な場所で始まると思います。コロナ時代の工夫や実績をどうやって生かしていくか、これが大きな課題になっていくでしょう。

明治学院大学が力を入れてきた《ボランティア活動》も、こうした社会全体の流れの中にあることには変わりありません。コロナが収まるにつれて、コロナ禍以前の《対面ボランティア活動》が再開されました。《1 Day for Others》のプログラム実施件数もコロナ禍以前に戻りつつあります。また《ボランティア大賞》は 2020 年度発足以来初めて、対面形式でプレゼンテーションや表彰式を行うことができました。こうした活動に積極的に取り組んだみなさんは、二年間の非常に不自由な期間を知っているだけに、よけい、対面によるボランティア活動の貴重さを体感されたのではないのでしょうか。ボランティア活動がいっそう充実感を伴って復活してきたと言えるでしょう。

ただ、それだけではないと思います。コロナ禍の不自由な二年間、ボランティアを続けるために私たちは、「新しく何ができるか模索する」「コロナが終息した後に備えて布石を打つ」ことに時間を使い、「小さなことでも何かできることはないかと、その人の個性を生かしながら積

極的に行動」してきました。中には、「情報技術によるコミュニケーションの利便性」をうまく活用したものもあったかもしれません。コロナの重しがなくなった今、コロナ禍で工夫したり将来のために布石を打っていたことを活かすチャンスが巡ってきたのだと思います。ここで生まれた新たな工夫を従来のボランティア活動に加えることによって、明治学院大学のボランティアはコロナ時代を逆に巧く利用して、一層厚みと深みを増すことに成功したといえるのではないのでしょうか。

みなさんの積極的な参加と今後の拡がりを期待しています。

2022 年度ボランティアセンター報告書の刊行にあたり

ボランティアセンター長 猪瀬 浩平

ボランティアセンター（以下、ボラセンと略する）の 2022 年度の活動報告書がまとまりました。2022 年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、オンライン授業が全面的に導入されてから 2 年が経ち、対面の授業が本格的に復活しました。その一方で、感染力の強い変異株の発生によって感染が急拡大する時期には、ボラセンのスタッフを含め、多くの学生・教職員も感染者や濃厚接触者となりました。ボラセンの実施するプログラムも変更や中止を余儀なくされました。2020 年度、2021 年度に引き続き、この一年もボラセンにとって試行錯誤の年でした。そんなコロナ禍のなかでしぶとく続けられてきた学生たちの活動が確実に育っていくとともに、新たな活動が力強く芽を出しているのを感じることができました。

以下、2022 年度の基本方針で定めた、4 つの柱に沿って活動を説明していきます。

1. 構成員（学生・教職員）全員のボランティア活動への参加促進と支援

一日社会体験プログラム「1 Day for Others」は対面の活動が中心になるとともに、実施数が昨年度よりも倍増しました（2022 年度対面 54 プログラム、オンライン 4 プログラム、参加学生 267 名／2021 年度対面 3 プログラム、オンライン 19 プログラム／2020 年度オンライン 10 プログラムのみ）。「ボランティアファンド学生チャレンジ（以下ボラチャレ）」は 4 件を採用しました（応募も 4 件）。「いつでもボランティアチャレンジ（以下いつボラ）」には 9 団体（応募相談は 11 件）を採用しました。いつボラの応募件数は、2021 年度の 7 件から増加しており、活動が学生に定着してきたと評価できます。

いつボラは 2022 年度 2 月の運営委員会で、対象を教職員に拡大しました。これに伴い、教職員の活動や、教職員と学生が連携する活動を生み出すよう、情報発信を始めています。

2. 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラムの展開

ボラセンが実践部門の支援を行い、各学部学科の運営委員が、ボランティアと学びとの結びつきについて指導する「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」は、2022 年度は 2019 年度生 3 名、2020 年度生 2 名がサティフィケート（修了証）を授与されました。2019 年度生、2020 年度生ともに、コロナ禍によりボランティア活動が難しい期間が長くあり、認証を受ける学生は多くはありませんでした。しかし、認証を受けた学生たちは、コロナ禍に直面する社会で必要なこと、できることを真剣に考えながらボランティアを実践し、学部学科の学びと結びつけながら最終報告書を書き上げました。ボランティアセンター運営委員会だけでなく、学長や各学部長（教養教育センター長）で構成される明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム認証委員会でも、高く評価されました。

2 月現在、2021 年度生 38 名、2022 年度生 32 名が活動しています。1 年目生の登録が伸び悩んでいます。登録したけれど、認証までいかず辞めてしまう学生が多い点も、プログラム開始

当初からの課題です。運営・認証のシステムについても必要なスリム化を意識し、コーディネーターを中心にボラセンのスタッフがインテグレーション講座の持ち方など、実践と大学での学びの融合を一層高めていくための改善案を検討しています。

3. ボランティアセンターの交流・活動・研究の場としての機能の充実

2020 年度以降、オンラインを活用しながら様々な授業に対する支援を積極的に行ってきていました。2022 年度は秋学期から対面授業が全面的に実施されるようになり、教室にスタッフがでかけていく形のボラセンガイダンスも実施しました。

また、教員の持ち込み企画も実施しました。たとえば、国際学部の竹尾茂樹名誉教授の提案により、性暴力をテーマに発信を行う大藪順子さんの写真展示を横浜校舎クララ・ラウンジで実施するとともに、大藪さんのトークセッション（ボランティア・カフェとして実施）を行いました。竹尾先生には、小諸の農家と明学をつなぐ企画や、湘南の NPO と明学をつなぐ企画など、様々な提案をいただきました。このようなかたちで、教職員の提案をうけながら、大学と社会の接点を広げられればと考えています。

横浜校舎のボランティアセンターコラボレーションスペースでは、明治学院共通科目や、国際学部のゼミなどでの活用も図られました。また、夏休みのボランティアの参加を促すため、7 月にはボランティアフェアを実施し、地域の団体や学生の関心が高いテーマの団体などに集まってもらい、対面で来室した学生への情報提供を行いました。さらにボラチャレ団体、いつボラ団体の活動に付随するグッズ（生理用品、農作業に関する道具等）の保管場所としての機能も果たし、学生活動をサポートしました。一方、白金校舎のボランティアセンター来室者数は、横浜と比べると低い状態にありますが、中高大連携の一環として、明治学院高校の生徒がボラセンを訪れたり、ボラセンのある 10 号館前のスペースをつかったホップづくり（社会連携課、JR 東日本と協働）など、新たな動きも出てきています。

4. ボランティアセンターにおける活動の発信・広報の強化

大学ウェブサイトのボランティアタブ内のコンテンツ見直しを行い、情報の最新化をすすめました。また、ボランティア参加者の声を広くコンスタントに発信するため、ボランティアタブ内に参加者の声を集約したコンテンツを作成しました。

以上に含まれない事項として、特筆すべき点としては、中高大連携の本格始動があります。中高大連携は、学院長が主宰する明治学院教育ビジョン本会議に位置づけられた「ボランティア教育プロジェクトチーム（以下、プロジェクトチーム）」によるものです。プロジェクトチームでは、これまでタイにあるパヤオセンターへの中高大合同のスタディーツアーの実施が準備されてきました（パヤオプロジェクト）。しかし、コロナ禍によって現地訪問ができず、プロジェクトチームの活動も停滞していました。本年度は、パヤオプロジェクトだけでなく、ボランティアセンターが実施しているプログラム（1 Day for Others やボランティア・カフェ）を、中高大の生徒にも広げる形でボランティアの中高大連携の在り方を模索しました。また、現地訪

問を見合わせたパヤオセンターとの交流も、有志学生が中心となったオンライン交流を、中高の生徒も参加する形で実施しました。

また、ボランティアセンターのスタッフ研修も3回実施しました。ボラセンにかかわる全スタッフが参加し、ボラセンの課題を共有したうえで、その解決策を考えました。さらに、学生の多様な背景を理解し、適切な学生サポートができるよう、2022年度は非常勤コーディネーターの砂川秀樹氏による学内講演「多様な私たちが多様に生きられるために：LGBTQと社会課題」を学内関係者に公開して実施したのち、ボラセンスタッフでジェンダーやセクシュアリティを意識したうえで、学生への接し方を見直すためワークショップを実施しました。

社会が抱える課題、学生や教職員が直面する課題は、新型コロナウイルス感染症だけではありません。社会課題に向き合うとは、わたしたちの日常の中で出会う他者の声に耳をすまし、丁寧に関係を紡いでいくことから始まります。そしてそれは、今の組織の在り方について、課題や問題がないのか常に振り返り、批判を受け、そして恐れることなく見直しを行っていく姿勢が必要です。この1年間私たち自身ができたこと、できなかったことを振り返りつつ、さらに小さい声や、弱い声を聴けるようになること、大きな力に頼ることなく、他者と共に生きられるようにしていく力をボランティアセンターに蓄えていきたいと思います。この報告書をお読みいただき、忌憚なくご感想やご批判をいただきますことをお願いいたします。

I . 特 集

特集

「ボランティアセンターギャラリー ～対面活動の再開～」

2022年度はコロナ禍で停止していた対面活動を再開し、様々な活動や成果報告が学内外問わず活発に行われた。ボランティアセンター教職員も活動先等に赴き、学生とともに社会課題の理解や解決に取り組んだ。



4月22日 ボランティア・カフェ
「ファッション・レボリューションデー関連企画
「ザ・トゥルーコスト」上映会&トーク」



5月14日 いつでもボランティアチャレンジ
「enjoy! サッカー教室」



6月24日 ボランティアファンド学生チャレンジ
学生団体 Peace ☆ Ring ICAN のバラ植え替え



7月12日 夏のボランティアフェア



8月28日 1 Day for Others (中高大連携)
「タイのTEENAGERと交流しよう!」



9月30日 学生企画「煙やろうじゃないか」看板設置



10月5日 1 Day for Others
「日本の着物文化を再活用する「秋のリサイクルきものフェア」」



11月5日 第3回ボランティア大賞授賞式



12月7日 ボランティア・カフェ
「写真は語るー STAND Still 写真展からみる非言語表現がもたらすもの」



1月27-29日 1 Day for Others
「国際協力団体の活動を紹介する!! ～ワークショップ、出展を通じて広報を手伝う～」



2月18日 いつでもボランティアチャレンジ
「Kawaii 華道体験レッスン」



3月15日 明治学院大学教育連携・ボランティア・サ
ティフィケート・プログラム授賞式

日々の活動やイベント風景は、
ボランティアセンター各種 SNS で発信中



@MGVC2011



@mgu_vol

Ⅱ. 2022 年度活動報告

1. 2022 年度ボランティアセンター行事一覧

4 月	ボランティアセンターガイダンス 開催（オンライン） 1 Day for Others 実施（1 件） ボランティア・カフェ① 開催
5 月	ボランティア・サティフィケート・ガイダンス 開催（オンライン） 2022 年度第 1 回ボランティアセンター運営委員会 開催 1 Day for Others 実施（9 件） ボランティア・カフェ② 開催
6 月	ボランティアファンド学生チャレンジ 2021 中間報告会 開催 インテグレーション講座（登録 1 年生対象）実施 1 Day for Others 実施（9 件）
7 月	ボランティアフェア 開催 1 Day for Others 実施（2 件） ボランティア・カフェ③ 開催
8 月	オープンキャンパス 参加 1 Day for Others 実施（4 件）
9 月	1 Day for Others 実施（1 件）
10 月	1 Day for Others 実施（9 件） ボランティア・カフェ④ 開催
11 月	ボランティアファンド学生チャレンジ 2022 募集 第 3 回「ボランティア大賞」 開催 インテグレーション講座（全登録生対象） 実施 2022 年度第 2 回ボランティアセンター運営委員会 開催 1 Day for Others 実施（11 件） ボランティア・カフェ⑤ 開催
12 月	ランチタイムトーク 開催 1 Day for Others 実施（3 件） ボランティア・カフェ⑥ 開催
1 月	1 Day for Others 実施（4 件）
2 月	1 Day for Others 実施（2 件）
3 月	ボランティア・サティフィケート・プログラム修了式 開催 2022 年度第 3 回ボランティアセンター運営委員会 開催 オープンキャンパス 参加 1 Day for Others 実施（3 件）

2. 2022 年度来室者数

新型コロナウイルス感染症拡大以降、オンライン利用の環境整備を進めてきたが、2022 年度はボランティア募集を開始する団体も徐々に増え、募集情報の収集やボランティア活動の相談などで来室する学生が前年度に比較し大幅に増加するなど、活況を取り戻しつつある。引き続き、利用目的や時期等により窓口来室とオンライン来室を効果的に織り交ぜながらセンターの活用を促進していきたい。

2022 年度月別来室者数

単位：名

月	2022 年度			<参考> 2021 年度		
	(白金)	(横浜)	(オンライン)	(白金)	(横浜)	(オンライン)
4	50	322	72	53	231	74
5	67	283	28	15	39	41
6	57	328	23	14	136	40
7	45	263	19	30	97	15
8	6	22	38	7	7	14
9	54	103	19	16	51	9
10	62	313	16	30	90	17
11	68	283	13	48	152	25
12	41	117	8	39	165	3
1	27	137	2	26	77	7
2	12	31	4	4	8	0
3	38	36	10	47	29	7
計	527	2,238	252	329	1,082	252

3. ボランティア大賞

(1) 総括

本学では「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」をはじめ、学生のボランティア実践と、大学の学びとの融合を意識した取り組みがなされてきた。ボランティア大賞は、そうした観点から成果を発表してもらい、学内外に発信していくことで、教育理念である Do for Others を具体化していくことを目的に 2020 年度に開始され、今回で 3 回目を迎えた。

ご存じの通り、入学以降のボランティア実践を、といっても多くをコロナ禍での学生生活を送ってきた学生にとっては、大きな制限の中での工夫、そしてそうした「波」の間での実践であった。その中でも、様々な活動がなされてきていたことは、いつボラ、ボラチャレといった学生への資金助成をする制度などから伺うことができるが、例年に比べて応募をためらう学生が多かったことも否めない。また、今回 3 回目にして初めて、二次審査は対面で行うことができた。そのため最終審査を経て、表彰式も同時に実施をした。

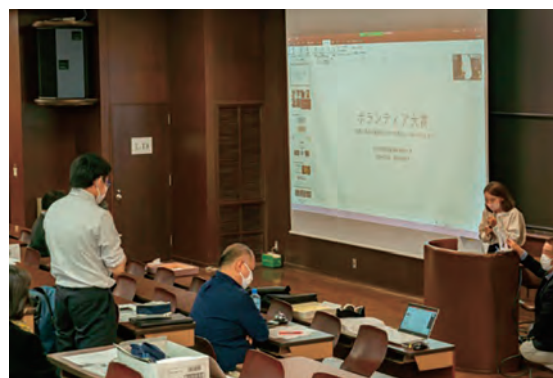
応募資格	本学在学生（院生含む）による活動であり、応募は個人によるものとする。 ※科目等履修生、団体としての応募は除く ・教育理念（Do for Others）の具現化を図る活動であると言えること ・応募者は一次審査通過の場合、必ず二次審査時の発表を行なえること ・申請者が明治学院大学入学後の活動を審査対象とする
申請期間	9 月 20 日(火) ～ 10 月 5 日(水)
広報	7 月下旬からポートヘボン、ホームページニュース欄、ポスター掲示等を通じて実施
審査	(1) 一次審査 10 月 7 日(金)～10 月 17 日(月) (2) 二次審査 11 月 5 日(土) (3) 最終審査 11 月 5 日(土) 審査員により合議を行い、各賞を決定した。
審査結果	【大賞】該当なし 【優秀賞】 「本質と敬意の重要性を学び具現化した私の学生生活」 安居院 桃子（社会学部社会福祉学科 4 年） 【審査員特別賞】 「労働者とボランティアの関係から見る～ボランティアに法律は必要か否か」 小澤 隼也（法学部消費情報環境法学科 4 年） 【奨励賞】 「子供たちの成長に貢献できた 2022 年」 杉田 愛衣子（国際学部国際学科 3 年） ※学年は応募当時

3. ボランティア大賞

一つの活動を立ち上げ、そしてじっくりと取り組んできた報告もあれば、苦手意識をもつ対象者に敢えて関わることから、苦手を克服して多くの学びを得たという報告もあった。また、多種多様なボランティアの入口をのぞいて少しずつ気にしていたことを、長期ボランティアの現場で深くテーマとして改めて考えていく機会になった報告など、アプローチもそれぞれが特徴的であった。また、今回ゼミの関係で二次審査をオンラインでプレゼンテーションを行う学生がいた。昨年は留学中の学生が時差のある中、参加してくれた。

3回を経て、今の形式など改めて見直す中で、明学生の多くの実践と学びを多くの人たちに伝える「場」としていきたい。

(ボランティアコーディネーター 菅沼 彰宏)



(2) 受賞学生報告

【優秀賞】

本質と敬意の重要性を学び具現化した私の学生生活

社会学部社会福祉学科 4 年 安居院 桃子

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私は、社会福祉学科で学ぶにつれ、この社会に存在する「偏見」について、疑問と悔しさを抱え続けていた。「なぜ人は、多角形の一角を見ただけで全てを知った気になり、否定するのだろう」と、社会に対する行き場のない憤りを感じていた。その分野は、障害や女性、ホームレス、高齢者や子どもと広範囲に渡る。

大学1年次の授業で見たビデオに「俺は好きでここに居る」と述べるホームレスの方に出会ったのが、全ての始まりだ。当時は、「ホームレス＝可哀想な人」という偏った見方を持つ自分の無知さに恥ずかしさを覚え、同時に「大学でこれを学びたい!」と衝撃が走った。

そこから私は、とあるご縁によって「子ども、子育て」に対象が狭まる事になったのである。生まれてから22年、一番と言ってもいいくらいに、熱中する分野に出会った。

そんな私のボランティア活動としては、子育てコミュニティの運営やカンボジアの子ども達への学習支援、中高生向けオンライン相談サイトを運営等がある。そして同時にアルバイトとして、子どもスポーツ教室、小学生への学習支援、保育園、学童、子ども体操教室等でも働いていた。上記活動を通じて、私の中で大学内での学びと繋がることばかりで、日々新鮮な驚きに包まれていた。「子ども達や子育てって、思っていたものと大きく違うようだ」その衝撃は今も忘れられない。

コロナで大学の授業がオンライン化した事により時間が生まれ、週6日勤務や、1日に3つ以上のボランティアやアルバイトに行くような、熱量がとても高く保ち続けられている4年間であった。

2. ボランティア実践の内容

子育てコミュニティの運営やカンボジアの子ども達への学習支援、中高生向けオンライン相談サイトを運営等、幅広い活動をしてきたが、今回はその中で私が熱量高く活動していた、「子育てコミュニティ」について述べさせて頂きたい。

私の運営する子育てコミュニティは、「おとなも子どもももっと自由になれる場所」というテーマをもとに、家庭、学校、習い事でもない、4つ目の居場所として存在している。

時代やコロナの情勢とともに、地域の繋がりが薄まりつつあるこの日本だからこそ、オンラインで深い繋がりを欲している人は、SNSの発達と同時に沢山存在している。

ここでは、親と子、そして私たち若者世代の3世代で子育てをしていく事で、より自由で豊かな子育てを実現している。具体的な実践内容としては、大きく分けて「①子ども向け」「②大学生向け」「③親向け」の内容がある。

具体例)

①子ども向け

子どもの好きを見つけて授業を開催する「子ども先生」や、若者世代と本気で遊ぶ「青春パレット企画」、宿題終わった子が参加できる「マイクラ部」

②大学生向け

大学生の興味に対して社会経験を積む運営メンバーが深掘りし実現までサポートする「チャレンジプロジェクト」

③親向け

子育てしながらも自分らしく生きる親御さんにインタビューした「コラム」、頑張っているけど評価されにくい、そんなパパの繋がりをうむ「パパBAL」

3. 実践と学びをどうつなげ、どう深めたか

私にとって実践は、大学内の授業を通じて「多様性を受け入れる姿勢」に対しての理解を深める事になった。

実践を重ねていきながら授業を受けていると、先生が提示してくださる事例に対して、イメージが沸きやすくなったのと同時に、事例は事例でも異なる角度が多数存在することを知った。高校時は先生の発するものはこの世の全てだと思っていたが、そこから授業をより主体的に受けられるようになって、有意義な時間が過ごせるようになった。

4. 今後の課題、方向

ボランティア大賞時は、「マイナスな偏見は知らないから生まれる」を別分野で自分の目や肌で感じたい！と考え、内定を頂いていた介護の業界へ進むと公言していたが、現在は「今まで得てきた知見を深め、より多くの子どもや子育てに携わる人たちと笑顔を分かち合いたい」という思いのもと、自分で教育事業を立ち上げている。

私が学生時代学んだものを、多様性に生きる子ども達と一緒に再び味わいたいと考えている。

5. 私にとっての「Do for Others」とは

「他者を知る努力をする」だと考える。

社会福祉を学んでいて、一番忘れてはいけない事は「関心を持つ事」ではないだろうか。目の前にいる人が、どんな人生を、何を思っ歩いてきたのか。又、何を大切に生きていきたいのか。そこに関心を寄せてはじめて、真の他者貢献になるのではないだろうか。

挑戦したいという思いがあったからである。そこで自分の社会に貢献したいという思いを活かした活動をしたと考え、ボランティア活動を開始した。



【審査員特別賞】**労働者とボランティアの関係から見る～ボランティアに法律は必要か否か**

法学部消費情報環境法学科 4 年 小澤 隼也

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私がボランティア活動をしようと思ったきっかけは、自分が大学生になってから新たな事に挑戦したいという思いがあったからである。そこで自分の社会に貢献したいという思いを活かした活動をしたいと考え、ボランティア活動を開始した。

2. ボランティア実践の内容

多種多様なボランティア活動を通じて世の中に存在する社会課題に触れる事により、自らの興味のある課題の発見をしようと考え、大学ボランティアセンターが運営している「1 Day for Others」にて15プログラムに参加した。特に国際的な支援活動に興味を持ち、フェアトレード団体の活動や、各国の文化交流を目的としたイベントのボランティアに注力した。フェアトレード団体の活動については、大学のプログラム後にも個人的に継続して参加し、自分自身のボランティア活動の大きな経験となった。

また、参加だけではなく主催者側の観点を学びたいと考え、授業でご協力を頂いた岐阜県の団体（益田どんぐりの会・ホープフルハーツ）からの協力を頂き、2つのプログラム（オンラインお花見プログラムの準備・開催の二部制）を「1 Day for Others」にて開催した。主催者側として行う事の難しさもあったが、「オンラインを活かしたボランティア活動」というコロナ禍でも活動が出来た事に非常に意義を感じた。

最大のボランティア経験は、東京オリンピック・パラリンピックボランティアに計19日間参加した事である。長期に渡る活動の中で、ボランティアの活動環境について着目するようになり、ボランティアに参加する人にとって楽しく、また活動したいと思わせる工夫や制度について自らの経験から分析しようと考えた。

3. 実践と学びをどうつなげ、どう深めたか

私は様々なボランティアに参加した経験を、自分の学部で学んだ「労働法」といった法律と結びつける事によって、ボランティアの活動環境の改善に繋がりたいと考えた。

これをテーマにしたきっかけは、休憩時間が事前に通知されていた時間より短くなり十分な休憩をとることが出来なかった、受け入れ側の担当者が高圧的な態度で指示するなどの問題を体験し、ボランティアの活動環境が保障されていないと考えたからだ。さらにボランティアと労働者の違いが金銭面等の違いのみで法的保護の違いが生じていることが問題だと感じた。そこで労働基準法によって労働者が保護されるように、ボランティアも活動の環境保護に対して法律による保護が出来るのではないかと考えた。

まず、労働者・ボランティアそれぞれの定義を比較する。労働基準法における法律の適用については、「労働者」である事が前提としてあり、これに当てはまらなければ適用外とされている。労働者の定義は「事業又は事業者に使用される者で賃金を支払われる者」と規定されているが、ボランティアの定義は「自発的な意思と無償で社会貢献を行うこと、または行う者」

と言えるため、ボランティアは労働基準法の定義では「賃金を支払われる者」の点から当てはまらず、適用外と考えられる。

しかしもう一つの点、「事業又は事業に使用される者」の点については、ボランティアも使用者つまり受け入れ先側の指示に従わず自分の思い通りに活動できるわけではなく、賃金すなわち対価を支払わないからと言って労働基準法が求める事業者側の責任が適用されないことに疑問が残る。さらに現在、この労働者の規定が適用されない＝労働基準法の適用がなされないとして問題となっている「フリーランス」に対しての保護が進んでおり、フリーランス保護新法が検討されていることから、雇用関係が無いことから問題が顕在化し、保護に動くといった流れが形成されつつある。

以上の点からボランティアに対しても改めて法的に規定し、法律による保護を行う事でボランティア活動に対する環境改善に繋げることが必要だと考えた。

しかしながら、実際にボランティアの法的保護が必要かという点、法的規定とボランティアの自発性との矛盾な関係があるが故、難しい実情がある。ボランティアの良さは何より「自由」である。無償に意義を見出している人もいれば、休憩せずに活動したい人もいる。だが、このように「自分が良ければいい」といった考えがむしろ環境の悪化を招いていると考える。この状況を改善していくにはまず前提としてボランティアがどうあるべきかを考える機会が必要だと考える。法律制定にあたってパブリックコメントを募集している手法があるように、客観的な意見を取り入れていく事が必要だ。そうすれば、自主性ありきの「自分が良ければいい」といった考えを無くし、環境改善に繋がるだろう。

4. 今後の課題、方向

私は社会的にボランティアへの認識が不十分だと考えるので人々がボランティアに触れる機会を増やすことが必要だと考えている。例えば、私の大学においてサティフィケート・プログラムといった制度があるように、公的にも一定のボランティア活動を行う事で認定を行う制度を設けるべきだと考える。ボランティアなどの社会貢献を評価される仕組みがあれば、参加するきっかけになるのではないだろうか。まずはボランティアを人々の身近にすることでボランティアに対する社会的認識を醸成し、結果的にボランティア全体の活動環境まで目を向けることに広がっていくことが出来ればよいと考える。

5. 私にとっての「Do for Others」とは

他者への貢献を通じて、自らの価値観を見つめ直し、多様な価値観を身に着ける事によって、人により貢献できるような人間になる事を示す言葉であると感じた。そしてその貢献の輪が広がる事で、より良い人間社会が形成されていくものだと考える。



【奨励賞】**子供たちの成長に貢献できた 2022 年**

国際学部国際学科 3 年 杉田 愛衣子

私は 2022 年初頭より、以下の 3 つのボランティア活動を精力的に行った。

1 つは明学のサークルである「OPENROOM」を通して行った、岐阜県の金山小学校にいる少人数クラスの児童との月に 1 回の交流である。1 月から各回午前 8 時から 1 時間、大学生側が考えてきた季節に関するクイズを披露したり、児童と一緒にしりとりやものを探してくるゲームをやったりした。毎回児童側も事前に準備した、楽器演奏や朗読などといった出し物を披露してくれた。交流する回数は少なかったが、回数を重ねる毎に児童の集中力や協調性が向上しただけでなく、彼らが周りの人にこの活動のことを沢山話してくれるくらい、楽しい時間を提供できたという点で、かなり彼らに貢献できたのではないかと考える。

2 つ目は、同じく明学のサークルである「りもぐるみ」と行った、金山中学校にいるフィリピン出身の生徒と日本語を使って交流する活動である。この活動は 4 月末から毎週月曜日と水曜日の 11 時半から 1 時間ずつ行った。そこでは、まず生徒が毎日書いている日本語の日記を音読し、大学生はその内容を元にいくつか質問をした。その後時間が余れば日記から拡大させた話をしたり、しりとりをしたりした。セッションを続けていくうちに日記の内容もだんだん濃くなっていただけでなく、少しずつ私たちの質問にも的確に答えられるようになっていった。また、1 学期までは個別教室でゆっくり学んでいたが、2 学期からは社会科の授業を通常クラスで受けるようになるなど、目に見えて大きな進歩があった。

3 つ目の活動は、貧困や虐待に悩む子供たちの学習塾のサポートボランティアである。6 月末から毎週水曜日に学習塾に行き、3 時間ほど子供たちとボール遊びやカードゲームをしたり宿題を手伝ったりした。部屋にこもって歴史の本を見たい子もいたり、友達とワイワイ騒いでいたい子もいたり、様々な性格の子がいた。そのため、社会福祉学の授業でのケーススタディを生かし、基本的には一人一人がやりたいことや考え方を尊重し、こちらからは考えを押し付けないように心がけた。その結果、活動を続けていくうちに、勉強が好きではない子も少しずつ宿題に向き合えるようになってきたり、塾に来る回数が増えたりした。

これらの活動を通して、大きくわけて以下の 2 つのことを学んだ。

1 つ目は相手の立場に立って考えることの重要性である。相手を決めつけないようにするために、活動に参加する前に相手のバックグラウンドや性格について他のメンバーや塾の運営者に少し聞くようにしていた。そうすることにより、彼らがなぜこのような行動や発言をするのかが少し理解できたし、どのような言葉をかけたらいいか吟味してかけられた。

2 つ目は、相手を沢山褒めることの重要性である。例えば、心理学の「学習」という項目で学んだことを生かし、サークルの活動では毎回子供たちから最近できるようになったことや

やったことを教えてくれたので、たとえ些細なことであっても「すごいね！」などの褒め言葉を添えるよう心がけた。そうすると、相手から話を始めたり、その会話量が増えたりした。このことから、褒めることは子供たちとの距離を縮めるのにかなり大切なのだと改めて気づいた。

今後は OPENROOM の活動は 3 年生いっぱいまで引退になり、塾のボランティアも対面の活動のため、今後時間をとって参加できる機会は少なくなるかもしれないが、りもぐるみの活動は留学から帰国後、秋からも参加し続けたいと考えている。

私にとって「Do for others」とは、他の人の力になることにより自己啓発を図るということだと考える。なぜなら、キャンパス内ではなかなか出会えない子供たちと活動することにより、彼らの成長に貢献することができただけでなく、自分自身も彼らのおかげでできるようになったことや新しく気づいたことが沢山あったからである。他の人を助けようと動くことにより、自然と自分と向き合うことができるようになるため、自己分析にも役に立つ。このことから、何か活動をやってみたいと思っている人は、どんなタイミングであったとしても決して遅くはないし、始めるに越したことはないと思う。



オープンルームのクリスマス会



りもぐるみでのセッション

4. 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム

(1) 総括

「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」は2016年度より始まった、ボランティアによる学びを認証する明治学院大学独自のプログラムである。全学の正課教育と連携し、大学での学びとボランティア実践を融合することで、本学の教育理念“Do for Others”を具現化し、その理解と実践を深め、共生社会の実現に資する力を身につけることを目的としている。

サティフィケート（修了証）の取得には、入学年度より5年以内に、3つの要件：(1) ボランティア実践（入学後135時間以上）、(2) インテグレーション講座（全4回）の受講、(3) ボランティア実践と結びつけた科目の単位修得（3科目以上）、を充たす必要がある。

(1) の要件については、2020年度のボランティアセンター運営委員会において「コロナ禍により活動時間が確保できなかったことを考慮して、135時間に満たなくても67時間以上のボランティア活動の実績があれば最終報告書を受け付ける。その場合は別紙で申告書を添付して現場でのボランティア活動に代わりどういった取り組みをしたかを申告すること。」という決定がなされ、2022年度もこれに従って認証がなされた。

また、(3) の要件については、2019年度登録生までは、各学部学科と教養教育センターが指定した科目のうち16単位の修得が要件となっており、2020年度登録生（3科目以上の単位習得）とは異なる制度での認証が行われた。

2022年度の各プログラムもコロナ禍に左右されたが、時機をみて対面とオンラインとを交えて実施した。秋学期の第2・3・4回インテグレーション講座（午前はボランティア大賞）は3年ぶりに対面で実施することができた。内容については、第1回インテグレーション講座での猪瀬センター長による講義や、第2回インテグレーション講座での教員による対談「文学とボランティア」など、一年目から学問とボランティア実践との融合を多面的に捉えられるように企画した。

最終報告書は2020年度登録生2名、2019年度登録生3名の提出があり、それぞれの学部運営委員により学部の専門性を深める指導がなされ、3月認証委員会において全員の認証が認められた。3月15日に小チャペルで授与式を行い、学長より一人一人に修了証が手渡された。

（ボランティアコーディネーター 磯野 昌子）

(2) 2022 年度スケジュール

日 時	内 容
3 月 4 月	大学から新入生に郵送される配付物「明治学院大学ボランティアセンター プログラムのご案内」の中にサティフィケートについて記載、大学ホームページで告知
5 月 11 日(水) 5 月 16 日(月) 5 月 20 日(金) 6 月 1 日(水) オンライン Teams 13:00-13:25	ガイダンスの実施（ボランティアと教育の連携についての意義、プログラムの概要を説明）
6 月 24 日(金) 5 限 対面 6 月 27 日(月) 3 限 対面 7 月 2 日(土) 2 限 オンライン 7 月 29 日(金) 2 限 オンライン	第 1 回インテグレーション講座 対象：登録 1 年生 【テーマ】「ボランティア実践から学ぶとは」 【内 容】これからボランティア活動を行うにあたって必要な心構えや、活動報告書の書き方、その意義について 【講 師】猪瀬 浩平（ボランティアセンター長 教養教育センター教授） 菅沼 彰宏（ボランティアコーディネーター） 磯野 昌子（ボランティアコーディネーター） 砂川 秀樹（ボランティアコーディネーター）
10 月	登録 3・4 年生の第 4 回インテグレーション講座におけるプレゼンの指導（ボランティアコーディネーター）
11 月 5 日(土) 場所： ・白金校舎 1101 教室 （午前／ボランティア大賞、午後／第 2 回インテグレーション講座） ・各教室（学部別分科会）／第 3・4 回インテグレーション講座	第 2・3・4 回インテグレーション講座 対象：全登録生 【テーマ】 登録 1 年生：「文学とボランティア」 登録 2 年生：「ボランティア実践を大学での学びに結びつける」 登録 3・4 年生：「ボランティア実践と大学での学びを融合した“私の Do for Others”」 【内 容】 午前の部：「ボランティア大賞」の聴講 午後の部：登録 1 年生は、グループごとにボランティア実践の状況とボランティア大賞の感想を共有した。その後「文学とボランティア」をテーマにした講師の先生方の対談を聞き、考えたことをグループごとに共有した。 登録 2・3・4 年生は、学部ごとに分かれ、3・4 年生は自らの「ボランティア実践と大学での学び」の成果をプレゼンテーションした。2 年生は、ボランティア実践の現状を報告し、運営委員の先生とコーディネーターからアドバイスを受けた。 【講 師】（敬称略） 登録 1 年生： 教員：篠崎 美生子（教養教育センター）、 猪瀬 浩平（ボランティアセンター長、教養教育センター）

	担当：磯野 昌子（ボランティアコーディネーター） 登録2・3年生： ①文学部、心理学部、国際学部 教員：小椋 道晃（文学部）、清水 美紀（心理学部）、 林 公則（ボランティアセンター長補佐、国際学部） 担当：砂川 秀樹（ボランティアコーディネーター） ②経済学部、社会学部、法学部 教員：齋藤 弘樹（経済学部）、三輪 清子（社会学部）、 西村 万里子（法学部）、岡本 実哲（センター長補佐、 経済学部） 担当：菅沼 彰宏（ボランティアコーディネーター）
2023年2月22日(水)	ボランティアセンター運営委員会（認証）
3月7日(火)	認証委員会 教員：学長、副学長、各学部長、教養教育センター事務局長、 ボランティアセンター長 陪席：学長室長、ボランティアセンター次長、ボランティアコー ディネーター
3月15日(水) 場所： 記念館1階小チャペル	修了証授与式 認定対象者5名（うち欠席者1名は後日別途授与）

(3) 2022年度プログラム登録者数

	学部						合計
	文	経済	社会	法	国際	心理	
2019年度登録生 第4回インテグレーション講座 の受講者	0	0	0	2	0	0	2
2020年度登録生 第4回インテグレーション講座 の受講者	1	0	1	0	0	0	2
2021年度登録生 第3回インテグレーション講座 の受講者	2	2	8	0	4	5	21
2022年度生 第2回インテグレーション講座 の受講者 ※（ ）内は第1回インテグレー ション講座の受講者	3 (3)	1 (5)	5 (11)	6 (7)	1 (2)	1 (4)	17 (32)
合計	6	3	14	8	5	6	42

(4) 取り組みの様子

2022 年度に新たに登録した学生は 32 名であった。そのうち 11 月の第 2 回インテグレーション講座を受講しレポートを提出し、1 年目を終えた登録生は 17 名である。

2021 年度登録生のうち、11 月の第 3 回インテグレーション講座を受講しレポートを提出し、2 年目を終えた登録生は 21 名である。

2020 年度登録生は 3 名であったが、その内 1 名は留学中のために最終報告書の提出を来年度に延ばした。

2019 年度登録生で、昨年度最終報告書の提出を見合わせて 4 年目に継続した学生は 8 名いたが、その内最終報告書を提出したのは 3 名にとどまった。

登録生は、全学的に授業の管理にも活用されている「manaba」を通して毎月の活動報告書を提出し、コーディネーターからのフィードバックを受けている。

(5) 修了学生のタイトル一覧

「資本主義社会での持続可能なボランティア実践」 法学部消費情報環境法学科 4 年/塙 彩香

「外国人に日本語を教えるということ」 法学部消費情報環境法学科 4 年/三河 眞弓

「労働者とボランティアの関係から見る～ボランティアに法律は必要か否か」

法学部消費情報環境法学科 4 年/小澤 隼也

「ノートテイクを通じた障がい理解と今後の課題」 文学部英文学科 3 年/木村 なつみ

「まちと学生のつながり探し」 社会学部社会福祉学科 3 年/高久 綾花

※小澤 隼也さん（法学部消費情報環境法学科 4 年）は「明治学院大学ボランティア大賞」に論考を掲載済のため、ボランティアサティフィケート報告集では未掲載とさせていただきます。

(6) 修了学生報告

資本主義社会での持続可能なボランティア実践

法学部消費情報環境法学科 4 年 塙 彩香

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

大学に入学する前までは、「ボランティア」というと、「ただ時間がある人、余力がある人が、社会のため、困っている人のためになにかするもの」というイメージが大きかった。大学に入学してから、ボランティア・サティフィケイト・プログラムに参加することになり、講座を受けたり、関連する授業を受ける中で、ボランティアについて深く考えたり、積極的に関わるようになった。正直に言ってしまうと、ボランティア・サティフィケイト・プログラムに参加したのは、就職活動への焦りからだ。何か話せる話題を作りたい、他の人は何かを頑張っているのに私は何もない、という焦りだ。しかし、活動していく中で、様々な学びがありボランティアへの関心が大きくなった。ボランティアというなんとなく大ごとのような気がしてしまいが、小さなものから大きなものまで誰にでもできる活動だという事を、このプログラムを通して実感した。

これまで、私はいくつかのボランティアをしてきた。最初はボランティア初心者だったため、大学から紹介していただいた 1 Day for Others のプログラムの中から興味のあるものを選んで、ボランティア・サティフィケイト・プログラムの要件を満たすのを目標に、ボランティア活動に取り組んでいた。特に、私は海外に興味があり、国際的な活動をしたいと考えていたため、関連したボランティアに取り組んだ。そこでは毎回様々な人に出会い、ボランティアについての考えを深めた。

2 年次には、コロナの影響でボランティア活動の機会が減ってしまった。しかし、家にいてもできる活動もあった。コロナが流行し始めたころには、マスクを手に入れることが難しかったため、児童養護施設や老人ホームなど、多くの人が集まる施設であるにも関わらず、マスクを手に入れるのが難しい人達の助けになればと思い、自分でマスク作りの活動を始めた。結果的にこれが、私のサティフィケイト・プログラムの中で大きな意味を持つこととなった。1 Day for Others の活動は、元々ある組織の中に自分が参加して、言われたことをやるのが主だったが、マスクづくりは自主的な活動だったため、自分でどのように活動するかを考えながら実践したことで自分の成長にも繋がった。

2. ボランティア実践の内容

私が主に行ったのは、コロナ禍でのマスク作りボランティアだ。コロナが流行し始めたころには、おうち時間が増え、自分で家で可愛いマスクを作っていた。ちょうどその頃、マスクの供給が追いついておらず、どこに行ってもマスクが売り切れているとニュースで毎日報道されていた。アベノマスクも話題になっていた頃だったため、紙マスクには劣るけれども布マスクでもあった方がいいのではないかと、こんな時だからこそ誰かの助けになりたい、老人ホームや児童養護施設など、特に感染拡大の恐れがあるにも関わらずマスクの入手が困難な人々に届けたいという思いで、自ら知人に声をかけ活動を始めた。結果的に、活動時間は 100 時間以上、約 600 枚のマスクを寄付した。地元の新聞に取り上げて頂いたり、寄付した先の保育園の子供たちがメッセージを送ってくれたり、とても良い反応を頂いた。

このマスクづくりの活動から、私は資本主義社会での持続可能なボランティア実践について考えた。資本主義の社会では、ボランティアをするにもお金が必要なので、特に金銭面が問題

となると考える。1年次に参加していた1 Day for Others の活動では、元々大きな組織がある中に自分が参加するだけだったため、ボランティア活動だけに集中していればよかったのだが、マスク作りの活動は自主的な活動だったため金銭的な問題に直面した。

そこで私は、近くのレストランの方に頼んでマスクを売らせてもらったり、知り合いにリメイクのお店をしている方がいたので、そこで売らせていただくように頼んだりした。こうして得たお金で新たな材料を買い、マスクを作って寄付するというのが、私が自発的に考えて実践したボランティア活動だ。このような活動の仕方は時間や労力がかかる。合計で約 600 枚のマスクを寄付したが、売ったマスクを含めるともっとたくさんのマスクを作った。ただ、私のように金銭的にあまり余裕のない大学生であったり、大きな組織がなくても、このサイクルを利用することで自主的なボランティア活動をすることが出来る。

マスクを売ってお金を得たという点に関しては様々な意見があるかと思う。しかし、自分の利益のためではなく、得た利益によってボランティアを行ったので、ボランティアの条件である無償性を満たしていると考ええる。あるボランティアでは、何か物を売ったり、イベントで得た利益をお金として寄付したりするものもあるが、私はそのお金から更に活動を発展させて、マスクという形で寄付をした。ここから自発性についても考えることができると考える。

3. 実践と学びをどうつなげ、どう深めたか

実践と学びの結びつきについては、高齢者社会と法、社会保障法の授業では、特に社会課題について考えさせられた。今の日本の現状と、その変化についていけない既存の制度の中で救われない人たちがいることに気付かされた。コロナの流行など、大きな問題が発生した時には人々はまず自分自身のことに集中し、政府は社会全体をどうするかを考える。そのような中で、助けの必要な人々は必要な援助をすぐに受けられない現状があると思う。私は、マスクづくりを通して少しはそのような人々の助けになれたと考えている。

また、ボランティア学入門の授業では、ボランティアの条件として「自発性」「非営利性（無償性）」「公共性」について学び、特に私は「非営利性（無償性）」について考えた。この無償性については様々な考え方があり、経済的に余裕のない人を活動から排除する理由になり得ることや、金銭の介在によって活動が円滑化させられるといった意見もある。私の活動では、自分たちでお金を作り出し、そのお金で活動するというサイクルを実現させた。

4. 今後の課題、方向

私は、4年次のドイツに留学にて、ソーシャルワークの勉強をした。また、3年次には韓国に留学をし、様々な国の問題やボランティア活動にも関心を持つようになった。私の韓国での留学先大学では、ボランティアが卒業要件となっていたり、アメリカでは進学の際に成績と同じようにボランティアが重要視されるのに比べて、日本はあまりボランティア活動が活発ではないと感じている。そのため、今後は各国のボランティア活動の違いについても学んでみたいと考えている。そして、私は、消費情報環境法学科の学生として、環境問題について多くの授業を受け、関心を持ってきた。ヨーロッパの国々は環境に対しての考えが日本と異なり、すぐ進んでいると生活している中で感じたため、環境に関してもより深い学びができたらと考えている。

学びの観点からは、私は自分でお金を作り出してそのお金でボランティアをする、持続可能なボランティアの実現について考えたので、別の形でもこのようなボランティアが出来たらと考えている。

外国人に日本語を教えるということ

法学部消費情報環境法学科 4 年 三河 眞弓

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

「日本語を教える事」を始めたのは、高校生時代に遡る。高校生でオーストラリアに留学した時、知り合いの子供に日本語を教える機会があった。その時、初めて自分の母国語を母国語にしない人に対して教えるのは難しいことだと痛感した。また、同時に彼らの学習へのモチベーションを保つ為、教え方も工夫しなければいけないことも実感したのである。実際、日本語の文法や文字の使い分けは複雑、且つ、覚えるのに忍耐力を要する。日本でしか使わない言語にもかかわらず、修学に時間も必要である。時に、文句を言われることもあったが、当時は言い返す言葉もでなかった。この経験を機に、「なぜ、日本語を学ぶ人がいるのか」という、根本的な疑問に陥ったのである。

大学に入学して、技能実習生など「外国の人」で日本に滞在している人達のことを学んだのである。複雑な言語を学び、日本にきて、人権や生活環境、これらのストレスからくる心身の疲れが彼らの精神を削っていると講義を通じて痛感したのである。日本国憲法では、外国人労働者も国民と同様の権利を享受する権利があると述べているが、実際、給与未払いや時間外労働を強いられるケースが報告されている。この学びをきっかけに、彼らが日本語を勉強しているのは、「出稼ぎ目的」だけでなく、「日本で生活するための必要な情報」を逃さない為ではないか。と、考えさせられた。そこで、サレジオ教会の活動に参加したのである。

トゥンバ高校でのボランティアは、スウェーデンの教育制度に興味もあったことから、留学コーディネーターに相談して、参加させてもらったのがきっかけである。実際、技能実習生のように日本で稼ぎに行くわけでも、滞在しているわけでもない生徒が如何にモチベーションを保っているのか、興味があったが故に活動を開始したのである。

2. ボランティア実践の内容

ーサレジオ教会ー

サレジオ教会での活動は、「ベトナム人の為の日本語教室」という名前で活動している。活動の時間中は、夕食を一緒に食べたり、活動を知ってもらえるように広告を作ったりした。技能実習生が、「わからない＝怖い」という感情を無くす努力をした。

実際、日本語は教えているが、学習の時間は1時間のみである。他の2時間は、技能実習生の悩みを聞いたり、繋がりを作ったりすることを念頭に活動していた。日本の制度や生活、仕事の悩みを相談することで「言語」を教えるよりも、より実用的な支援ができたと思う。実際、異国にいて同じ国同士でかたまる傾向があるように、日本人と触れ合う機会はあまりない様子だった。日本人の知り合いとして名前が挙げられる人々は皆、職場の人であった。日本語を話す機会があっても、それはストレスや緊張という負荷が掛かっている。敬語ではない形で会話できる場所・人間や職場の悩みを相談できる人を持つことで、精神状況は大きく異なる。現に、一度相談に来た人は、皆、2度・3度と訪問するようになった。実際、日常生活における不安や、仕事の悩みを法律や規約を元に解決方法を一緒に考えた。労働法を振り返ったり、宅建で学んだ内容の相談が来たり等、自分の学びを振り返る事も多々あった。

他方、解決できない課題もあった。区の相談窓口の存在を知らなかった技能実習生に窓口の場所を教え、仕事帰りに寄るよう促した。しかし、一人で知らない場所に行くのは怖いことである。実際、活動の日に会った際、窓口に行けたか訪ねると、「躊躇して行けなかった。」と、言われたことがある。ついて行きたい気持ちもあったが、自分は未だ学生で、彼らと活動時間が異なったため、全てをサポートすることは出来なかった。また、相談できない悩みを抱えている技能実習生に参加してもらいたいものの、翌朝（早朝）に仕事があったり、夜遅くまで仕事があったりなど、スケジュールが合わない人が居た。この活動の名目である「気軽に」という目的が中々実現できずにいたのは、活動を振り返って悔やまれる点である。

ータウンバ高校ー

「ベトナムから来た技能実習生に日本語を教えること」と「スウェーデンの高校生に日本語を教えること」。この両者の活動の大きな違いは、「日本に慣れる為」か「日本を知るため」だと認識している。同じ「日本語を教える」という趣旨でも、「誰に教えるか」によって、活動の形態も大きく異なる事を学んだ。タウンバ高校の学生で日本語を履修している子の多くが、日本語修学のきっかけは「漫画」や「アニメ」、「ゲーム」だと、言っていた。スウェーデンでは、日照時間が5時間という厳しい季節がある。夜が長いことも有り、日本の娯楽に救われた子供達も多い。彼らが日本語専攻のクラスに入って、最初に衝撃を受けたのは、日本語の難しさである。文法の構造や文字、単語が大きく異なるアジアの言語を興味本位で勉強し始めた事に後悔している生徒もいた。しかし、彼らにとって、専攻を変えることは、もう1度、高校生活をやり直す事を意味する。その手間を惜しむ事と引き合いに賭けた時に、留まることを選ぶ生徒もいた。このような生徒の日本語へのモチベーションを保つ為に、授業では日本のアニメや日本の景観を流したり、日本料理を作ったり、桜が咲けば、遠足に出かけた。このように、日本に触れる機会を増やして、日本への興味・関心を保っていた。

3. 実践と学びをどうつなげ、どう深めたか

明治学院大学で履修した長谷部先生の「多文化共生」や猪瀬先生の「ボランティア学」の講義を通じて、自分のボランティア活動のあり方や、どのような支援が求められているのかを学ぶことが出来た。講義で学んでいなかったら、私の支援は実用的だとは、言えなかったと思う。この学びを実践に生かしたことで、文献や資料では読み取れない技能実習生が抱える悩みを知ることが出来た。また、日本は「多様性」のある社会を目指している。しかし、蛭原先生の「憲法1, 2」で得た知識と技能実習生の現状を照らし合わせると、彼らの生活や人権は十分とは言えない。毎年、海外から日本に来る労働者が増えている状況を見ると、彼らの扱い方を迅速に対応・見直すべき課題であると考ええる。他にも、消費情報環境法学科で必修・選択必修となっている科目や明治学院大学が提供している「宅建試験対策講座」で得た知識が、技能実習生を助けることに繋がった。

4. 今後の課題、方向

私が留学していたスウェーデンは、真の「多様性」に満ちた国である。日本で技能実習生が抱える悩みや現状について教えてもらった事を元に、如何にスウェーデンが「多様性」を確立したのか、大学の講義や高校生達から学んだ。この知識を踏まえ、今後、日本社会は如何に対応していくべきか。活動を通じて考えていきたい。

ノートテイクを通じた障がい理解と今後の課題

文学部英文学科 3 年 木村 なつみ

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私が大学生になった年はまさにコロナ禍であった。そんな中でも何か新しいことをしたい、大学 4 年間を通して何かやり遂げたい、そんな気持ちからボランティア・サティフィケート・プログラムに登録し、ボランティア活動を始めた。大学 1 年生では 1 Day for Others を通してボランティアを行ったが、なかなか継続的にできるボランティアを見つけられずにいた。そんな私が主に行ってきたボランティアは大学 2 年生の夏休みから始めたノートテイクである。もともとタイピングが得意だったため、このボランティアの案内を見た際に自分の得意が誰かのためになるかもしれないと思い説明会・体験会に参加した。得意とボランティアを掛け合わせた結果 3 年生を終える今でも継続的に行うボランティアとなったのである。

2. ボランティア実践の内容

このボランティアでは、聴覚障がいのある学生の授業に参加しパソコンを使ってリアルタイムでの文字起こしや、オープンキャンパスでの学部説明会や模擬授業でのノートテイクを行った。ノートテイク全体の交流会では実際にノートテイクのサポートを受けている聴覚障がいのある学生だけではなく視覚に障がいのある学生や右半身に麻痺のある学生と交流する機会があった。また、ノートテイカーの中にも聴覚障がいではない障がいのある方も複数人いた。この交流会を通してノートテイカーである自分にできることは何か、その中でも身体的障がいのない自分とはどのような存在なのか、そもそも「障がい」とは何なのか、どのように扱われるべきなのかについて考えるきっかけとなった。

3. 実践と学びをどうつなげ、どう深めたか

ボランティアの実践によって、ノートテイクというボランティアは特別なことではなくお互いが補い合う助け合いの一環だ、ということに気がついた。私はノートテイクを行う中で、学生の受講スタイルに合わせ、学生にとって一番分かりやすい状態でテイクができるよう意識をした。そしてこの意識は、「聴覚障がい者への支援」と一辺倒に考えるのではなく〇〇さんへの支援、のようにその人自身を見る必要があるという認識につながっていった。また、健常者が障がい者に手を貸すだけではなく、私自身も大学で様々な支援を受けているように、立場が変わる場合もあることを学んだ。

一方で、日本社会に視点を置くとボランティアに対するハードルはまだまだ高いと感じる。大学での学びとボランティアに対する考え方を結びつけることでハードルの高さの原因について考えた。

1 つ目の原因は「社会アイデンティティ理論」が関係していると考えられる。この理論は、2 年次に履修した異文化理解の授業で学んだ。社会アイデンティティ理論は目の前で起きている出来事を理解するために人々を職業や性別などによってカテゴリー化しステレオタイプを生み出すことによって軽視、偏見、差別が生じることを言う。つまり、私はこの社会アイデンティティ理論によってボランティアで支援する側＝優れている、支援される側＝劣っているという考え

が生まれているのではないかと考えるのである。支援する側は優れている立場にいて、無償で奉仕活動をする、というイメージによってボランティアでは何か成し遂げなければいけない、ボランティアは大変そうといった捉え方につながっているのではないかと考える。

2つ目の原因は日本人のコミュニケーションの取り方である。異文化理解の授業で日本人のコミュニケーションの取り方は High context communication だと学んだ。このコミュニケーションの取り方は、直接的な言葉ではなく察することを重視する。このことから、1つ目の原因によって生まれたボランティアに対するマイナスイメージや固定観念を周りの様子をうかがうことでそのまま受容してしまっているのではないかと考える。さらに、「現代社会と芸術」を受講することで表象の影響力の強さを学んだことから、日本のボランティアにおける表象と固定観念は改善する必要があると感じる。

4. 今後の課題、方向

「3. 実践と学びをどうつなげ、どう深めたか」での考えを踏まえ、日本人のボランティアに対する考え方を変えることを今後の課題目標とする。前述したように日本におけるボランティアの表象や固定観念はボランティアに対するマイナスなイメージを広めている側面があると考えするため、まずはその表象と固定観念を変える必要があると感じたからである。また、単にマイナスイメージをプラスイメージにするだけではなく、日本は High context communication であることから日本の文化や性格、性質を理解した上でどのように表象と固定観念を変えていけるかを考えることが重要だと考える。加えて、ボランティアについてあまり詳しく知らない人へ正しい情報を伝えることも大切だと感じる。現在授業内プロジェクトとして、「自然」「コミュニケーション」を軸に東京をよりよくするための施設を構想している。現在は同じ年代、同じ性別、同じ職業の人と話す機会が多いが、そのような枠組みに関係なくコミュニケーションをとれる場所を作りたいと考えている。大きな事象を変えることは難しいことだと思うが、授業でも行っているよう、一つ一つ解決していきたい。

まちと学生のつながり探し

社会学部社会福祉学科 3 年 高久 綾花

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

高校時代に青年赤十字のボランティア活動や横浜市野島青少年研修センターでの年間ボランティアを経験し、大学入学後も活動を継続しながら、1 Day for Others に積極的に参加していった。1 Day for Others をきっかけに 2・3 年生で活動したヤマト繋がるプロジェクトでは、色々な所属や年齢、立場の方と関わる経験をした。企業に勤めるサラリーマン、自閉症や知的障害を持っている子どもたち、色々な地域から通う大学生、NPO 法人を立ち上げた方、地域ケアプラザや社会福祉協議会の職員の方々など、同じ「地域」の中に暮らしていても、同じ時・場所で過ごすことがあまりないことも多いと考える。そのような社会の中で、大学生がまち（地域）に関わっていくことは、地域の新たな繋がりや顔が見える関係性を築くなどの様々な影響を及ぼす要素になると気づいた。

2. ボランティア実践の内容

大学 2・3 年の時にヤマト繋がるプロジェクトというボランティア活動を行った。この活動はヤマト福祉財団・ヤマト労働組合(ヤマト社員さん)と学生、福祉施設が連携するボランティア活動で、ヤマト社員さんは全国からオンライン参加のためハイブリッド型での企画を展開しているものである。社会人と学生が繋がり、多くの気づきが得られる協働の場を作ることを目指して 2021 年から始まり、大学生とヤマト社員さんが連携しゼロから企画して作り上げていった。私は大学 2 年生で 1 Day for Others をきっかけに企画メンバーとして関わり、2 年目である 2022 年はサポートメンバーとしてチームのフォロー活動をした。

この企画では、5 月のキックオフ会議後 2～5 名のチームを 3 つ作り、7～10 月でチームごとに企画を練っていく。私は 1 年目に横浜市洋光台地域ケアプラザのコーディネーターの方と連携し、巨大サイズのおもちゃを作り→実際に洋光台の広場で遊び→遊んだおもちゃを大学のボランティアサークルへと共有する、という三段階で企画を行った。

企画を通しての出会いや発見は 2 つある。1 つ目は、洋光台というまちに学生やヤマト社員の方々、当日ボランティアのメンバーが愛着をもち親近感を持つことができたという点である。ほとんどのメンバーは横浜市外出身だったにも関わらず、事前ヒアリングや荷物の搬入、当日の企画で何度も洋光台に足を運び、駅前に立ち並んだ団地や、そこで生活する方々の買い物する場所、交通手段など、企画をきっかけに暮らしを垣間見ることができた。授業のない平日に足を運ばせていただいたことで、日中のまちの様子を知ることができ、企画当日の休日との違いを体感することにも繋がった。

2 つ目はルールや規則の中で自分たちがやりたいと思うこと・求められていることを叶えるアイデアを、みんなで考えることである。現在よりもコロナの状況が不安定で、企画実施までのプロセスで対面とオンラインのハイブリット版・完全オンライン版の 2 つを企画実施の 2 ヶ月前まで並行して検討する必要がある、「団地の広場の活用と障害のある子どもたちとまちの交わり」というニーズに対応を、コロナの状況下で実現する方法に頭を悩ませていた。結果的

に、話している人がわかるようにおもちゃのマイクを持つことや、強度な Wi-Fi を地域の方からお借りするなどの工夫を行い、繋がっていると実感してもらえるよう模索した。

3. 実践と学びをどうつなげ、どう深めたか

社会学概論の「専門職と当事者」「学生ボランティアの意義」という学びが印象に残っている。繋がるプロジェクトでは福祉系学部以外の学生も半数以上おり、障害のある子どもたちへの合理的配慮やタイムスケジュールに余白部分を作り出すことなど、意見が分かれることも多くあった。そこでは当事者からしか学べないこと、専門職の偏りがちな思考や前提にある立場の差が、言動に表出されていなくても互いに感じ取れるのかも知れないと感じ、専門職と当事者の関係性について思い出された。また文部科学省の「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について（答申）」を用いた授業では、ボランティア活動の意義と捉え方の学びを深め、ボランティアをする上でのまちに及ぼす良い影響と、ボランティア活動の課題や弱点を考える機会となった。

4. 今後の課題、方向

私はもともと地域に関心があったのではない。しかし、学科の学びを卒業後にどう繋げていくか悩んでいたところから、結果的にまちに関わる活動で多様な方と出会い共同作業をしたことによって、こうした場に来ることが難しい方や、自分に合ったサードプレイスを見つけづらい方へのアプローチを検討したいと考えるようになった。今後は活動をする中で関わらせていただいた「コーディネーター」という職種につくことを夢に、学んでいきたい。地域福祉ゼミに所属しており、4年生では社会福祉協議会でソーシャルワーク実習をさせていただく予定である。実習を通して実践と机上での学びから、地域における役割を改めて学んでいきたい。

5. ボランティアファンド学生チャレンジ（通称：ボラチャレ）

（1）総括

学生が自ら企画した活動を年間を通して応援する奨励金制度「ボランティアファンド学生チャレンジ（＝以下ボラチャレ）」。2021 年度助成の団体は 4 団体であったが、前年同様、まだまだコロナ禍の影響が続き、計画どおりとはならなかった活動が多い。

特に Ark の「教育格差是正キャンペーン」（無料塾の生徒を対象にした課外活動への支援）については、通常の学習支援活動の運営に追われ、申請した課外活動までに至らなかったことから全額返金となった。これまでボラチャレでは、通常活動に対する支援は原則として対象外とし、発展した取り組みにのみ助成していたが、今後は困難な状況が認められる場合、通常活動や継続的活動も支援の対象とできるよう検討を進めている。

他の 3 団体（Voice Up Japan MGU、Peace ☆ Ring、Inspire Food MGU）は、活動場所を主に明治学院大学のキャンパス内においており、それぞれの考える社会的課題をまずは学内において検討し、その課題解決のために実践する場としたものであった。トイレへの生理用品の設置、バラの栽培、ビーガン食の導入（食の多様化の保障）など、どれも学内施設との調整が必要なものであり、横浜管理課や管財課（横浜）には多大なご協力をいただいた。バラの管理については次年度以降、管財課（横浜）に引き継がれることとなった（水やりは学生が参加）。また、ビーガン食についてはボラチャレ団体だけでなく多方面からのアプローチが功を奏して学内カフェにて常時販売されるようになった。生理用品の設置については、一年間のトライアルを経て次年度も継続申請があり、引き続き活動を支援していくこととなっている。

2022 年度に採択された団体も 4 団体であるが、どの団体の活動も、2022 年度に「いつボラ」や「ボラチャレ」、学生持ち込み企画による「1 Day for Others」など、ボランティアセンターのプログラムに関わって活動してきたものを、さらに発展した形での応募となった。今後は 1 年間のプロジェクトとして完結するものだけでなく、学生の主体的な活動を継続的に応援しつつ、その自立を支援していくことが課題だと感じている。

（ボランティアコーディネーター 磯野 昌子）

5. ボランティアファンド学生チャレンジ（通称：ボラチャレ）

2021 年度の募集要項は、以下の通りである。

募集内容	テーマ：「社会課題にチャレンジ！」 社会の課題を発見し、解決のためにアクションを起こすチャレンジ精神のあるみなさんを支援します。分野は問いません。 奨励金：原則上限 20 万円
応募資格	・ 明治学院大学の学生による学生団体、ゼミ、サークル等による活動の企画であること。 ・ 個人の活動は対象外となるが、2 人以上でチームを結成すれば申請できる。 ・ メンバーに卒業生や他大学生、社会人等が含まれる場合、メンバーの半数以上が本学学生であること。
助成対象期間	2021 年 12 月 1 日(水)～2022 年 11 月 30 日(水)
応募方法	「明治学院大学ボランティアファンド学生チャレンジ応募用紙」をメールにて提出
選考	提出書類をもとにボランティアセンターと面談
援助対象	活動現場までの旅費交通費・宿泊費、消耗品費、イベントゲストへの謝礼・交通費、図書購入費、印刷・製本費、通信・運搬費、使用料・賃借料（イベント会場施設使用料など）、保険料 ※次の項目を除く：人件費、飲食費（飲食が必須手段となる場合は可能）、懇談会・慰労会の会場費、機材購入費、寄付に該当する使用
活動報告/ 提出物	・ 中間活動報告会（2022 年春学期中）にて途中経過報告を行う ・ 活動終了後、2022 年 12 月末日までに、以下を提出 活動報告書および写真 「奨励金使途報告書」・領収書

（2）2021 年度助成団体一覧

（助成期間：2021 年 12 月～2022 年 11 月）

プロジェクト名	団体名	助成金額	使用額
教育格差是正キャンペーン	Ark（進学型無料塾）	¥195,000-	¥0-
生理用品プロジェクト	Voice Up Japan MGU	¥180,210-	¥95,348-
平和の想いを伝えるバラと桜を明学に！ ～核兵器を知る、考える、伝える、きっかけに～	任意団体 Peace ☆ Ring	¥90,000-	¥26,529-
足元から「食」を考える	Inspire Food MGU	¥150,000-	¥75,808-

（3）2022 年度助成団体一覧

（助成期間：2022 年 12 月～2023 年 11 月）

プロジェクト名	団体名	助成金額	備考
小中学生と自然体験を通して暮らしを考える	Piece of Nature	¥200,000-	2022 年度いつでもボランティアチャレンジ採用
岐阜と明学の架け橋に！	OPENROOM	¥200,000-	2022 年度いつでもボランティアチャレンジ採用
パヤオプロジェクト	Be with Phayao	¥200,000-	2022 年度中高大連携 1Day 実施
生理用品プロジェクト	Voice Up Japan MGU	¥195,870-	2021 年度ボランティアファンド学生チャレンジ採用

(4) 助成団体活動報告

◆教育格差是正キャンペーン

団体名	Ark (進学型無料塾)
企画の目的	このプロジェクトの目的は、通常の学習活動ではなく、「体験型学習」を行うことによって「経験」を通じた豊かな人間性の形成や生徒の興味関心の拡張を目指す。経験や体験の機会が不足している生徒は低所得世帯に多いことから、興味関心が薄くなるために将来の夢や自分の得意分野、才能、進学する目的を見つけにくい傾向にある。 また、低所得者層の貧困の連鎖は教育格差・幼少期の経験の不足が原因の一つである。その子が親となり、また子に対し十分な人間教育の場を与え切れていない現状から、我々が少しでも多くの生徒に「経験」を通じた豊かな人間性・思考力の形成を試みる。

実施概要

進学型無料塾 Ark は、中野区を拠点に毎週土曜日の 18:00 ~ 21:00 の時間で活動している。講師は高校生と大学生のみで構成されており、従来の無料塾の課題点であった、大人と生徒の世代間ギャップを解消するために、当塾では講師を大学生と高校生に限定している。そのため、生徒との年齢と心の距離が近いことで、教育カリキュラムの差や世代間ギャップが小さく、教育指導時の威圧感も軽減される。

当塾は、名前にもある通り進学に特化した無料塾である。従来の無料塾は、生徒の人間教育に重点を置いていたため、学習教育が不十分で、勉強したい生徒に適した、教育機関としての役割が果たせていなかった。しかし当塾では、入塾時に基礎学力テストを行い、生徒の得手不得手を講師も理解したうえで生徒一人ひとりに合ったカリキュラムを作成している。また、報告書を通じて、保護者と塾での学習状況や出来事を共有することで、高校受験の可能性や試験点数の向上を実現している。進学を目指し、従来の無料塾にはない有料塾に近い環境であるため、第一志望校の合格、英検 5, 4, 3 級、漢検に合格など、実績を残すことができた。当塾としての功績は、読売新聞、朝日新聞、ヤフーニュース、日本経済新聞、雑誌 AERA に掲載された。

また、あらゆる企業との提携やプロジェクトに加え、他の無料塾や地域のこども食堂との協働も行っており、社会全体としての教育事業の拡大や、低所得世帯の生徒の支援を行っている。

今回のボランティアチャレンジの奨励金を活用したプロジェクトでは、キャンプ体験や科学実験、TGC (体験型英語学習施設) での一日英語体験などを計画していた。経験を通して生徒の興味関心を広げることを目的としたものである。しかし、新型コロナウイルスの影響や長期休暇中の学生講師の確保、生徒自身やご家庭の予定が合わないことによって、この計画は実施困難であった。顧問として招待を考えていた外部講師とも、謝礼やスケジュールの面で、実現しなかった。

感想・活動を通して得た学び

ボランティアチャレンジとして計画していたことが実施できなかったのは残念だったが、このプロジェクトを通して生徒との向き合い方の難しさを実感している。有料塾や家庭教師などでは、講師側にも塾から指導のマニュアルやカリキュラムが渡されているが、当塾では、何をどう教えるかは講師次第である。利点として生徒との距離が近く、生徒に合わせて柔軟に向き合えることで生まれる関係性はとても大切だが、距離の近さや有料塾で生徒が感じる金銭的、精神的負担がないことで、宿題をしなくてもいいという多少の甘えが生じてしまう。強制的にさせられている勉強ではなく、楽しんで勉強する環境を心掛けているが、その塩梅が難しいと実感した。活動を通して、生徒の、従順ではなく素直に疑問を持っている姿が、講師生徒ともに新たな発見やものの見方など視野の広さに繋がるのではないかと気づいた。

今後に向けて

講師を学生に限定した団体であるため、代表や幹部が社会人になった時の引継ぎが課題である。また、本当に支援を必要としている人に必要な情報を届けるために、当塾や無料塾の存在を見つけてもらう必要がある。民間の企業や他のボランティア団体とのつながりによる情報共有に加え、様々な人が繋がっている地域で協力し合えるように、人づてや自治体のあらゆる相談窓口や学校に資料を置いてもらい、知名度を広げたいと考える。知ってもらった後も、足を運んでみようと思う場所で活動内容がすぐ明確に分かるといいが、そこにも限界がある。私たち自身も、支援を必要としている人の状況や環境についても理解し寄り添う努力をしなければならないと考える。

（法律学部政治学科2年 佐藤 駿、経済学部国際経営学科2年 江口 音）

◆生理用品プロジェクト

団体名	VoiceUpJapan MGU
企画の目的	① 生理用品を無料で利用できるように学内のトイレに設置をし、必要な学生が必要なときに手に入れられる状況を当たり前にする ② 性別を超えて生理への理解を深めるきっかけを提供し、他者を思いやることのできる学生になるサポートを行う

実施概要

生理用品は、生理を経験する人にとってはトイレトペーパーと同じで生活必需品である。しかし、必要なときに、無料で当たり前に手に入る環境が整っていない現状がある。このことから、プロジェクト遂行期間は、生理用品が必要な学生が必要なときに無料で手に入れられることが権利として保障されることを目指し、横浜キャンパス 8 号館 1 階の女子トイレ・多目的トイレと、C 館食堂 2 階の女子トイレ・多目的トイレに生理用ナプキン二種類とタンポンの設置を行なった。また、生理用品に QR コードを付けて生理用品提供に対する Web アンケートも実施した。

結果、アンケートには約 5 ヶ月間で 132 回答が集まった。回答者のうち 60% が設置した生理用品の利用者で、「急な生理に対応できてよかった」という意見や、「一人暮らしのため経済的に助かった」という生理用品の購入負担軽減に感謝する声が見受けられた。また、利用しなかった回答者のうち 93% も「無料で生理用品の提供があれば使用したい」と回答しており、その理由として予期せぬ生理に対応できることや、経済的理由をあげており、生理用品の利用者と類似する意見が多く見受けられた。また、アンケート回答者の 99% が「トイレに無料で提供される生理用品は必要である」と回答しており、理由として「生理用品はトイレトペーパーと同じくらい必要」という意見や、性別の是正、経済的理由が挙げられていた。

このことから、無料生理用品の利用有無に関わらず明学生の生理に対する意識の高さを感じた。併せて、生理用品を利用しなかった学生のさらなる意見を把握するために、お昼休みに学内でアンケートへの協力を呼びかけ、ボランティアセンター内で実際に生理用品を展示し、生理用品への理解を促進するイベントを行なった。イベント開催のほかにも、生理に関するポスターを作成し、立て看板やボランティアセンター内での掲示を行なった。



実際の設置の様子

感想・活動を通して得た学び

プロジェクト立ち上げ当初は、何もかもわからないことばかりで、特に学内の各部署に対して設置の許可を申請するのに苦労したことも多かった。しかし、ボランティアセンターの方をはじめ、さまざまな方の協力のもと生理用品の設置を実現することができた。実際に設置をしてみて、生理用品が必要な時に手に入る大切さを利用者の声を通して改めて実感した。また、設置当初のアンケート結果は、「必要な時に助かった」という応急処置のような利用目的が多い印象を受けた。しかし、設置期間後半に入ると、「生理用品の購入にかかる経済負担が少し軽減された」という声や、「生理用品はトイレトペーパーと同じくらい生活必需品で、無料で手に入るのは権利だ」というような生理用品や生理に対する学生の意識も知ることができた。

アンケート結果以外にも、生理用品を補充する際に嬉しい発見があった。今回私たちは、生理に対して学生同士が話しやすくなるきっかけを提供したいという理由から、生理用品を個室内ではなく洗面所付近に設置した。メンバーからは、生理用品の補充中に、設置してある生理用品がきっかけで、学生同士が生理について話していたという報告が複数あり、私たちの活動がしっかりと役に立っていると感じることができた。長期間の生理用品の無料設置を経て、どれだけ生理用品の提供が求められているかを実際に知ることができ、生理というなんとなくタブー視される雰囲気のあるものについて、実態を理解するための大きな一歩を踏み出した1年間だった。



生理用品とポスターの展示

今後に向けて

他大学でも学生主導で生理用品を学内に設置する動きはあるものの、大学側との各種調整や交渉に時間がかかっていると聞いたことがあり、自分達もこのプロジェクトを実現させることは難しいのではないかと苦悩した時期もあった。だからこそ、ボランティアファンド学生チャレンジを通して実際に生理用品の無料提供ができたことは、自分達にとってとても大きな進歩だった。一方で、設置の許可申請や、日々の生理用品補充やチェックをどのように行っていくかまたアンケート回答数をいかに増やすかに注力しすぎたために、性別を超えて生理について理解を促すイベントをあまり開催できなかった。来年度のボランティアチャレンジにも採用していただいているので、来年度は生理用品提供の継続だけでなく、生理の経験有無に関わらず、より多くの学生が気軽に生理について知る機会を継続的に提供していきたい。

(国際学部国際キャリア学科4年 吉本 優芽)

◆平和の想いを伝えるバラと桜を明学に!〜核兵器を知る、考える、伝える、きっかけに〜

団体名	任意団体 Peace ☆ Ring
企画の目的	核兵器廃絶国際キャンペーン (ICAN) の名前がつけられたバラ「アイキャン」を横浜校舎に植樹することにより、核兵器の現状や核兵器禁止条約について考えるきっかけを提供する。

実施概要

2021 年 1 月に国連で採択された核兵器禁止条約に関し、2022 年時点でも日本においての議論や理解は十分とは言い切れない状況にあった。当会は核兵器禁止条約や核問題について周知できる活動を模索していたときに、当時当会の顧問であった国際学部の高原孝生教授に「アイキャンのバラ」について教えていただいた。これを横浜校舎に植樹し、関連したイベントを行うことで核問題等について考えてもらうきっかけを提供できるのではないかと思い、活動を行った。

※「アイキャン」は広島バラ育種家の田頭数蔵さんが NGO「ICAN」がノーベル平和賞を受賞したことに心動かされて名付けた新しい品種のバラである。

※プロジェクト名には「バラと桜を」とあるが、桜（長崎原爆を伝える「嘉代子桜」）に関しては設置場所、大学側の学内整備計画との兼ね合いにより断念することとなった。

感想・活動を通して得た学び

今回の活動の成果として、「アイキャンのバラ」5 株を明治学院大学横浜校舎に植樹し、春・秋の二季で花を咲かせることが出来た。

加えて、2022 年 1 月に苗を植えた際には、明治学院大学卒業生であり、長崎で被爆した和田征子さんにお越しいただいた。和田さんには植樹への参加だけでなく、ご自身の体験や日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）事務局次長として核兵器禁止条約の交渉会議に参加された際のご経験などをお話いただくことができた。ゆかりのあるバラを植樹するだけでなく、被爆体験や核問題に関するお話を当事者から聞くことができる機会を提供できたことは、重要であったと考える。バラの名前になった NGO「ICAN」の取り組みや現在の核廃絶に関する動きを学ぶことで、バラが存在する意義を単純なシンボルではなく、今まで核廃絶に取り組んできた人々の成果のひとつであると認識することができた。

また植樹当日の様子を複数の新聞社に記事として取り上げていただき、その記事を読んだ方から会の活動に使ってほしいと寄付をいただいた。このことから広報の重要性とそうした活動を行うなかで責任が伴うことを改めて認識した。



今後に向けて

今後の課題として挙げられたのは、バラを継続的に管理し、花を咲かせていくことである。生物であるバラは長年に渡って維持していかなければならない。また今回植樹した「アイキャン」は一般に購入できる品種ではあるが、特別な思いが込められたバラでもある。そのため現在は大学側と協議を行いつつ、継続的にバラを管理していく方法を検討している。

また「アイキャン」のネームプレート作成も今後の課題としてあげられる。現状、銘板等は安全性の問題で設置できておらず、より効果的な広報のためにその設置も早期に実現すべきと考える。

(国際学部国際学科4年 曾我 惇人)

◆足元から「食」を考える

団体名	Inspire Food
企画の目的	大学内で食に関する学びの場を設け、食の在り方への問題意識を持ち、環境改善に取り組むこと。

実施概要

我々は、「食」を起点に社会を考える、をテーマに活動を行なった。具体的には、「食の多様化」と「生産過程の理解」の二つを軸に進めた。

「食の多様化」については、ヴィーガン/ハラールなどの食事に制限を持つ人達の食環境改善や、そもそもヴィーガン/ハラールがどういうものなのかという情報発信を中心に企画を行なった。

「生産過程の理解」については、「食」を考える上で自分たちが食べているものや選択する食材がどのように出来ているのか、どのような生産の過程を踏んでいるのかを理解することを目的とした。特に、大学近隣に貴重な自然を体感出来る舞岡公園があるため、身近なようであまり考えることがない農業や自然に触れる機会の創出に取り組んだ。

以下、主な活動実施内容である。

実施年月		実施内容
2021 年	12 月	・ Inspire Food のInstagramのアカウント開設 アカウント名：「inspire_food_mgu」 フォロワー数：116 人、投稿数：67 投稿（2023 年 1 月現在） 毎週木曜を投稿日として、大学の食環境・ヴィーガンに関する情報・食の社会問題などをテーマに週一回投稿。
	3 月	・ 導入キッチンカーの選定
2022 年	4 月	・ ムスリム学生へのインタビュー 食に制限を持つ者に対して、学内の食環境についての調査。 ・ イベント「Vegan Week」企画
	5 月	・ イベント「Vegan Week」開催、アンケート調査
	8 月	・ 料理企画（1 回目） メニュー：「プラントベース豆乳担々麺」 実際の調理過程や材料をInstagramで投稿。
	9 月	・ イベント「Live with nature」企画 ・ 料理企画（2 回目） メニュー：「キーマカレー」 ・ 導入キッチンカーの打ち合わせ
	10 月	・ イベント「Live with nature」開催
	11 月	・ 料理企画（3 回目） メニュー：「かぼちゃの豆乳クリームシチュー、かぼちゃプリン」

学内に、アレルギーやヴィーガンなどに対応した食事提供の場が少ないため、学生利用が多いキッチンカーを導入し、食の多様化に対応した食事提供の場を設けることをボランティアチャレンジ応募当初目標の1つとして掲げていたが、期間内での出店は叶わなかった。しかし、すでに、Green Food Camper に依頼を行って導入店舗に目処が立っており、学内での出店の手続きに関しては、横浜管理課に引継ぎを完了している状態である。

5月に実施したイベント「Vegan Week」では、1週間の期間を設けて、横浜キャンパスに通う学生を対象に「食の多様化に関する関心度」を内容とするアンケート調査の実施とヴィーガンに関する掲示やクイズを行った。アンケート調査 203 名、イベント 34 名に参加してもらうことができた。また、普段の食事にも多様性を考えてもらうきっかけとなることを目的として、料理企画を行なった。ヴィーガン対応食を中心に、コストや作りやすさなどを考慮したものをメニューとして選び、実際に調理した場面や材料などを SNS で投稿した。

10月と11月にかけて開催したイベント「Live with nature」では、活動軸の1つである「生産過程の理解」を全体テーマとし、「食と農の身近な繋がり」「野菜ってどうやって作られるの?」「実際に自然に触れてみよう!」の全3回に分けて、講演会と舞岡公園での畑作業を行った。総勢 30 名の参加があった。それに並行して、本学と共同連携協定を結んでいる長野県小諸市の農家にご協力いただき、規格外のリンゴの販売も行った。リンゴは2個セット 100 円で約 40 kg 販売し、約 2 時間で完売した。7,800 円の売り上げがあった。



「Vegan week」



「Live with nature」講演会


「Live with nature」
リンゴ販売

感想・活動を通して得た学び

ボランティアファンド学生チャレンジを通して活動できたことは、Inspire Food にとって大変有意義であった。活動の幅を広げることができたことは間違いなく、同時に教授や舞岡公園のスタッフの方などへの人脈も得ることができた。

また、活動する中で、食に制限を持つ人の割合が少なく、中には食の多様化に興味や関心がない人がいることを痛感することがあった。こうした意見に触れることで、環境改善が必要だと考える私たちでは見えなかった課題も見つけ活動に活かすきっかけとなった。メンバーの中には、食に制限を持つ者はおらず、だからこそ活動するうえで勉強することが必要であった。SNS での情報発信は、Inspire Food にとっても重要な知識を得る機会となった。

団体運営の観点からいうと、何か行動するうえで全員が賛同するものばかりでない。意見が

分かれた時に、その中でどう行動すべきか、メンバー 1 人 1 人の意見に耳を傾けそれぞれが考え、行動する力をつけていったと実感している。

今後に向けて

1 年間の活動を通じて、学生に対して情報を発信し続けることが重要であると感じた一方で、情報発信の要となるInstagramのフォロワーの内、明治学院大学の学生が占める割合が高くないということが課題として挙げられた。私たちの声が届いてほしい相手に届けられるよう、SNS を含めアプローチを工夫していく必要がある。

「ボランティアファンド学生チャレンジ」としての活動は、2022 年 11 月で終了しているが、団体としての活動は継続していきたいと考えている。活動を継続させていくためにはマンパワーを確保することは必須となる。現在 4 年生が主体となって活動しているが、4 年生の卒業後も活動を継続できるように、後任を務めてくれる後輩の発掘と育成を行うことが早急に求められる。今後は、これらを課題として活動していく。

(国際学部国際学科 4 年 福留 真琴)

6. いつでもボランティアチャレンジ（通称：いつボラ）

（１）総括

「いつでもボランティアチャレンジ（略称 いつボラ）」は、本学の在学生在が自ら企画したボランティア（社会貢献）を実践したいと思った「その時」に申請できる援助金制度である。年度内のいつでも申請ができ、ボランティアセンターの教員（センター長、センター長補佐）、職員（含むボランティアコーディネーター）で面談を実施して、助成の可否を判断する。

募集要項は、以下の通りである。

応募資格	【個人】 明学生（休学・停学中の学生は申請できません） 【団体】 明学生のみで構成されている団体 ※採用は年間２回まで。年度毎の援助資金がなくなり次第、募集を終了。
応募条件	・「社会貢献活動」であること ・活動終了後１カ月以内の①報告書作成、②実施した活動の発表 ・指定期限内の使用援助金領収書提出と使途報告
応募方法	「いつでもボランティアチャレンジ応募用紙」をボランティアセンター窓口またはメールで提出
選考方法	申請書類と面談で選考し、結果を代表者宛にポートヘボンで通知
助成内容	【個人】 ２万円、 【団体】 ５万円を上限とする必要金額 ※選考時に減額されることがあります。 ※申請予算を使い切らなかった場合は、残金を返金する必要があります。
援助対象	活動現場までの旅費交通費・宿泊費、消耗品費、イベントゲストへの謝礼・交通費、図書購入費、印刷・製本費、通信・運搬費、使用料・賃借料（イベント会場施設使用料など） ※次の項目を除く：人件費、飲食費（飲食が必須手段となる場合は可能）、懇談会・慰労会の会場費、機材購入費、寄付に該当する使用

2022年度は、11件の申請があり、10件が採用（うち１件はコロナ禍の影響でのちに採用辞退）、１件がボランティアセンターの活動に吸収する結果となった。今年度は、対面活動を中心とするプロジェクトが大半を占めており、各プロジェクトが対面活動の内容を特性に合わせたリスク管理のもと活動を実施している。また、採用を受けたプロジェクトをベースに２団体がボランティアファンド学生チャレンジに申請・採択されるなど、本制度から発展的・挑戦的なプロジェクトに臨むケースが見受けられた。扱う社会課題も、スポーツ、環境、こども、多文化共生、人権等、バラエティに富んでおり、ゼミや授業で学んだことを現場で実践するようなプロジェクトも生まれている。

一方で、応募11件中9件がボランティアセンター職員からの声かけまたは教員からの紹介がきっかけであったと回答しており、直接的なアプローチの有効性が確認できた一方、自力での応募に課題があることも明らかとなった。ボランティアセンターにアクセスした経験のない

学生の利用をどのように獲得していくかは今後検討していきたい。

なお、本制度が4年目を迎えた今年度は、英訳版の応募要項および応募書類を作成・公開し、留学生を含む全ての学生が応募しやすい環境を整えたり、教職員の応募を可能とするため、教職員向け応募要項および応募書類を整備するなど、制度の見直し・改善等にも努めた。留学生および教職員の応募実績はまだないが、今後広く周知を図り、制度の効果的な活用を促していきたい。

（職員 菊池 範子）

（2）2022 年度助成企画一覧

応募日	実施日	プロジェクト名	決定額	使用額	申請者（団体の場合は団体名）
2021 年 12 月 21 日	5 月 14 日	初心者歓迎！サッカー教室 ※ 2021 年度採用プロジェクト	¥45,000-	¥30,030-	鈴木 雄太 田中 太智 熊埜御堂 悟
2022 年 4 月 8 日	—	畑やろうじゃないか	¥4,600-	— ※ 1	畑やろうじゃないか
2022 年 4 月 14 日	5 月 30 日	MGCloset Exhibition	¥33,500-	¥6,644-	MGCloset
2022 年 6 月 17 日	12 月 2 日	明学で「主戦場」を上映しよう	¥50,000-	¥50,000-	社会派映画同好会
2022 年 6 月 28 日	5 月 30 日	MG RAINBOW PRIDE	¥48,114-	¥48,114-	UP!UP!UP!
2022 年 7 月 20 日	8 月 27 日	Piece of Nature	¥36,600-	¥6,050-	Piece of Nature
2022 年 8 月 1 日	8 月 22 日	金山中学校との対面交流	¥20,000-	¥20,000-	りもぐるみ
2022 年 8 月 18 日	—	画面を通してではなく直接の交流を！ ～OPENROOM 岐阜訪問～	¥50,000-	— ※ 2	OPENROOM
2022 年 9 月 20 日	2 月 18 日	N・E・O フェス Kawaii 華道体験レッスン	¥15,300-	¥14,351-	石井 優衣
2022 年 10 月 4 日	11 月 4 日	画面を通してではなく直接の交流を！ ～OPENROOM リベンジ 岐阜訪問～	¥50,000-	¥50,000-	OPENROOM
2022 年 12 月 9 日	12 月 17 日	多文化共生スポット ワールドキッズ クリスマス会	¥49,006-	¥37,452-	明石 留美子 ゼミ
2023 年 2 月 2 日	3 月 4 日	GOCA CAFÉ 日本語で話そう	¥20,000-	¥5,395-	おおた桜本な私たち

※ 1 ボランティアセンター内での活動に移行したため、採用辞退となった。

※ 2 新型コロナウイルス感染拡大に伴い、訪問先より訪問不可の連絡を受け、採用辞退となった。

（3）採用プロジェクト活動報告

🏆 いつボラ「サッカー教室報告書」🏆



「当日の様子①」

当日子ども達は、本当に純粋にサッカーを楽しんでくれました。私達もサッカーを好きになってもらえるようにリフティングやドリブルなどのボールフィーリング系の練習を重視し、リレー式にしてゲーム性をもたせるなどの工夫をいたしました。



「当日の様子②」

私が主にメニューを進め、準備等している間、田中がサポート役に徹してくれました。小学生は特に興味が移りやすいので、当日役割分担できたことは非常にスムーズに事が運んだ要因になりました。また、写真撮影を主に担当した熊埜御堂も良い写真を沢山撮影してくれて、親御さんもメールで写真を喜んでくれました。

「主催者 鈴木・田中の感想と総括」

今回このサッカー教室の開催にあたり、備品発注やチラシ・グーグルフォーム作成等その他多くの仕事があり、私達が今までプレーしていたサッカーをする環境を作る事がどれほど大変なことであるかを実感しました。しかし、当日子どもたちが楽しそうにサッカーをする姿や、後日御礼のメールを親御さんからいただき、開催した甲斐があったと感じました。また、今回の開催を手助けしていただいたボランティアセンターの皆様や倉田小学校関係者の方々、明治学院大学各方面方に感謝の気持ちで一杯です！

MGCloset Exhibition —Z 世代が考える Y2K ファッション—

私たちは MGCloset という団体で、ファッションが抱える社会問題の解決を目指して活動している団体です。モットーである wear it again, wear it yourselfのもと、同じ洋服を長く大切に着ることによって少しでも環境などへの負担を減らして行くことを多くの人に伝えられるように様々な企画を行ってきました。今回はいつでもボランティアチャレンジを通して、古着をリメイクした衣装の展示会を行いました。

活動内容

今回は、大学で回収した古着を Y2K（2000 年に流行したスタイル）のテイストにリメイクして展示会を行いました。今リバイバルしている Y2K に焦点を当てることによって、今まで古着に抵抗があった人でも手を出しやすいと思いますし、私たちが施したリメイクもすごく簡単なもので、展示会に来て下さったかたも簡単にできると思います。展示会当日はただリメイクしたお洋服を飾るだけでなく、メンバーそれぞれが作成した作品のポイントをまとめたキャプションボードも用意しました。また、ファッション業界が抱える問題についてまとめたショートムービーを作成し、上映を行いました。



展示会ポスター
メンバーがデザインしました



各メンバーが衣装を作り、それに込められた思いをキャプションボードに書いて作品と一緒に展示しました

活動を通して得た学び

今回の活動を通して、社会問題に興味関心をもってもらうことの難しさを改めて感じました。私たちは、洋服を通して、現代の社会問題を考えるというのをコンセプトに活動しているので、特に若い世代はとっつきやすいと考えていましたし、今回の Y2K というトレンドを含めることでもっと関心を得られると思っていましたが、あまり私たちが期待していたほどにはいきま

6. いつでもボランティアチャレンジ（通称：いつボラ）

せんでした。もちろんプロモーションにも問題はあったと感じますが、今後はもっとみんなに注目してもらえるような企画ができたらよいと思います。



私たちの活動を知ってもらうために動画を撮り、SNS にアップしました

明学で「主戦場」を上映しよう 社会派映画同好会

活動実施日：2022 年 12 月 2 日（金）

活動実施の場所：明治学院大学横浜校舎 6 号館 610 教室

活動内容：

・企画の背景と目的

教科書にも詳しく記載されず、どのような問題であるかがうやむやになっている（なろうとしている）慰安婦問題。監督のミキ・デザキ氏自身がこの問題を知るために制作したと鑑賞後に知った際に、この映画をきっかけとして大学生（同世代）のなかで関心をもつ人を増やしたいと考えた。学ぶ機会がなかった世代にこそ、この映画をきっかけとして、この問題に関心を持ってもらいたい。また、本団体は慰安婦問題に特化しているわけではなく参加者やメンバーの意見を取り入れながら社会派映画の上映を継続して行なっていきたいと考えている。

・企画の達成状況

映画「主戦場」

上映後に参加者から「慰安婦問題を学ぶ最初の一步としてすごく意義のある映画だと思いました」「これを機に慰安婦問題についてさまざまな本や映画に触れたいです」「知らなかった論点を整理できた」といった感想が寄せられ、それまで慰安婦問題に深い関心を持っていなかったと思われる人に、この映画を通じて、慰安婦問題を知り、関心を持ってもらうことができたことが分かった。

監督へのインタビュー映像

これは、あらかじめ収録した、本団体主催者による監督へのインタビュー映像を流したものである。主な内容は、映画にも登場する、日本文学者、朴裕河氏の著作『和解のために』における慰安婦に関する記述についてであり、リベラル派からも賛否が分かれる朴裕河氏の立ち位置についての監督が自身の見解を語ったものだった。インタビューについて、参加者からは、「映画だけでは伝わらない監督の感触や主観についてお聞きできたのが興味深かった」といった声が聞けた。インタビュー映像は、監督の主観に触れ映画の理解を深めることに役立ち、また、映画で語られなかった論点を知るきっかけになったと思われる。

鄭栄桓教授のコメント

教養教育センター・鄭栄桓教授には、1. 「主戦場」の印象、2. 戦争を経験していない世代が、なぜ慰安婦問題を学ぶ必要があるのか、の二つを交えて話していただいた。またコメント後、参加者の疑問に、わかりやすく答えていただいた。これらについて、参加者からは「専門的な部分を噛み砕いて解説していただけた点が良かったです」などの感想が寄せられた。鄭栄桓教授による解説は、慰安婦問題に関する参加者の理解を深めるために有意義だったと思われる。

・新たに找つけた課題

<広報>

今回の宣伝では口コミを主とし、メンバー関係者を中心に声をかけた他、許可を得たうえでいくつかの授業で宣伝を行った。また、学内ではポスターと立て看板で宣伝をしたが、参加者の多くが運営メンバーの知り合いだった。このことから、交友関係がある狭い範囲にしか告知ができていなかったことがわかる。改善点として、より多くの学内の人の目に留まるように、長期間的にポर्टヘボンやサイネージ、三角ポップの設置などができるのではないかと考えた。当日も学生を呼び込むことができるのではないかと考えていた。しかし、参加者の方から、「映画の内容的に、関心があつて観たいという人が集まって観る映画なのではないか」という意見をいただいた通り、気軽に観に来てくれた方はいなかった。引き続き、社会派映画を上映し、多くの学生に社会問題に興味関心をもってもらえるきっかけを作りたい。



<企画チームの運営・計画実施について>

課題点として、まず言えるのは、今回はボランティアセンターや協力をお願いする教授への連絡、配給会社への連絡等を含め、企画の発案者である代表者に大きな負担がかかっていたことである。また、定期的なミーティングを行っていたものの、計画と進捗状況の把握を十分に共有することができず、宣伝準備も思いつく範囲の簡易なものになってしまった。

また、当初は口コミでも呼びかける予定だったが、運営メンバー間で、知り合いの人数や、集客力に差があり、思ったように人を集めることができなかった。

・参加者の反応



当日は20名に参加いただくことができた。日韓の慰安婦問題及び「主戦場」に興味を持っている学生が少なからずいることを認識するイベントを開催できたと感じる。イベント終了後には参加者アンケートを行ったが、回答は9件という結果となり、参加人数に対して回答者数が少なかった点が課題として挙げられる。次回イベントを開催する際は広報の強化、また途中退出した人にもアンケートを書いてもらえるような対策が必要である。アンケートでは「またこのようなイベントに参加したいか」の質問に対して回答者全員が「参加したい」を選択したため、社会派映画同好会として活動のモチベーションにつながる有効な結果を得ることができた。また、ミキ・デザキ監督及び鄭栄桓教授のコメントを紹介するパートに関しても好意的な感想が多く見られた。参加者が映画を見るだけでなく制作者、研究者の

意見も取り入れながら慰安婦問題について考察できるイベントとなった。

・活動を通して得た学び：

本学の教養教育センター・鄭栄桓教授や国際学部・阿部浩己教授に、上映会前に勉強会の講師を依頼し学習会を行ったが、依頼をする際に、慰安婦の基礎知識や教授がどのような立場から慰安婦問題を論じているのかを知る必要があった。上映会を企画した段階ではわからなかったが、勉強会の講師、上映会のコメントを研究者に依頼するということは、責任が伴うということを学んだ。(安田 大地)

見たいと思った社会派映画を告知するライングループという、内向きの「社会派映画同好会」が、いつの間にか同世代に向けて映画を上映する、外向きの「社会派映画同好会」になっていた。この変化が起きたのは、『主戦場』上映会したくない? という思いつきを、実行までグイと持っていく、同好会の仲間の行動力があったからだだったと思う。

それまでただ映画を観るだけで満足していた私だが、上映会を企画する中で、社会派映画を上映する意義を学んだ。取り上げるテーマは私たちの生きる社会と関わりが深く重大なことだが、上映数が少なく、元々関心がありアンテナを張っている人しか観に行かない、内輪になりやすい「社会派映画」だからこそ、外に広げていくことが必要なのだ。(水上 健)

私は今回の企画を通して、解決が困難とされている国際問題であったとしても、自発的に学び、上映会といった行動を起こし、他者と国際的問題の現状を共有することの大切さを実感した。私たち学生が主体となって企画することで、国際問題に関心の少ない若者を巻き込むことができると知った。また、私たち学生が、国際問題を知り、声を上げることで、問題解決の糸口を生み出す事にも繋がると学んだ。(白井 綱)

勉強会を行うことは、メンバー間の日本軍「慰安婦」問題に対する理解を深めることに繋がると実感した。例えば、デザキ監督に質問をする際にも過去2回の勉強会で生まれた疑問を踏まえた質問をすることができた。また、勉強会に向けて使用する文献を各自が読んで準備し、勉強会や本企画に関連するおすすめの動画や映画などを共有することができた。映画を初めて見たときに比べ、上映会の日にはさらに理解を深めながら観ることができたのではないかと感じた。(室田 素良)

企画当日は参加することが出来なかったが、私が想像している以上に「主戦場」及び慰安婦問題に関心を持っている学生が多くいることを知った。監督や先生にもコメントを頂き、新たな知識を得るなどして、非常に充実した企画だったと思う。ひとつの問題についてここまで考える機会は今まで無かったし、とても勉強になったので個人的にもまたこのような企画に挑戦してみたい。企画当日は機器トラブルもあったが、反省点を活かして次回の企画を実施出来れば良いのではないだろうか。(松田 実久)



8/27カカシづくり

ABOUT

学校で行う自然体験の意義は大きいものの、不登校や学校に行きづらさを感じている子どもは、そのような機会を得づらい状況にあります。Piece of Natureはこの点に注目し、主に不登校やそれに近い状態にある子どもを対象に、自然体験の機会をつくることを目標に活動しています。

子どもを交えた活動は2023年度開始予定のため、2022年度では大学生メンバーのみでお来作りを行い、子どもと活動する上でどのような活動内容が適切か、どのようなリスクがあるかなどを検討しました。横浜校舎の裏手にある舞岡公園で、スペシャルオリンピックス横浜陸上有志の会の方々にご協力いただき、合同で田んぼ活動をしました。

得た学び

舞岡公園の自然の豊かさを実感するとともに、田んぼでの農作業を行う際に必要な知識や技能、ボランティア活動を行う上での心構えを養うことができました。自然の中での活動は、虫による被害や刃物による怪我等、様々なリスクを伴うため心配なことも多くありましたが、活動を通して、服装や道具の扱い方に注意して取り組めば安全に楽しく活動できることを知りました。2023年度からも、子どもと周りの状況が常に把握できるよう心がけて、安全で楽しい活動を維持していきたいです。

今まで田んぼに入ったことがなかったので勉強になることがたくさんあり、来年度からの活動のイメージもつきました。今年の経験を来年度の活動に活かしていきたいです。

普段の生活から離れた環境での活動で心身ともにリフレッシュすることができた。慣れない環境でもあるため、健康、安全面に気をつけて活動したい。

活動の中で得た田んぼに関する知識を踏まえて、リスクを考えたり、来年度の活動の計画を立てたりすることが出来たため、有意義な活動であったと思う。

1年間の舞岡公園での活動を通して、田んぼでの農作業や自然について経験を積むことができました。私たちの活動の来年度からの本格的な始動を目指して、さらに様々な場所に出向いて、活動に必要な技能を習得していきます。



7/27草取り



10/1稲刈り



11/12肥料づくり

金山中学校との対面交流

実施日：2022/8/22

心理学部心理学科 2年 松本 愛未

【1. 概要】

私が所属する「りもぐるみ」という団体は、普段、金山中学校の中学生（以下、Aさん）とzoomを介して遠隔の交流をしています。目的は、フィリピンから来たAさんが楽しく学校に通えるよう、日本語で会話をするお手伝いをすることです。

コロナ禍でも、遠く離れていても人と繋がることができる利点を活かし、日々zoomで交流しています。今回は、zoomと対面の交流を比較し、本当にzoomは役に立っているのか、わざわざ対面で会う利点はあるのか体感するべく、私が「りもぐるみ」の代表として、Aさんに初めて会いに行きました。

【2. 目的】

同じ空間で交流することを通して、より仲を深め、普段の交流で活かすことができそうな情報を得たりすることです。普段のzoom交流では気がつかないことを発見します。

【3. 活動内容】

活動場所は、飛騨金山駅近辺です。元明治学院大学ボランティアセンターコーディネーターのTさんとともに、飛騨金山駅でAさん、金山中学校の先生と合流し、その周辺を散歩しました。主に訪れた場所は、金山小学校、筋骨、鎮守山、金山中学校です。

活動のネタとして、「りもぐるみ」の先輩方の「ぬいぐるみ旅行」を受け継ぐ活動をしました。今回対面交流に参加できなかった明学生のメンバーの人形を持参し、金山の景色と共に写真撮影をしました。他にも様々なアクティビティをしました。小学校ではボルダリングを体験し、鎮守山では両面宿禰の像を見ました。中学校では、校長先生とお会いしたり、普段zoomの交流時にAさんが使用している部屋に訪れ、黒板で絵しりとりをしました。

【4. 活動の成果】

普段のzoomでの交流では得られなかった気づきがたくさんありました。

金山という環境については、予想よりも暑かったです。山が多いから涼しいだろうと予想していましたが、体感では首都圏と大差ありませんでした。

また、Aさん自身については、案の定少しやんちゃなところがあると感じました。しかし、優しいところがあることは、対面交流で初めて実感しました。優しいと感じたのは、ぬいぐるみを撮影するときにぬいぐるみを並べることを自主的に手伝ってくれた時です。少ない情報ではAさんの性格の思い込みに繋がるかもしれません。そのため、実際に隣で歩き一緒に作業することを通して、普段は気づかなかったAさんの一面に気づくことができ良かったです。

対面交流で気づいたことは、後日再開したzoom交流に活かされていると思います。例えば、普段Aさんが「暑い」と言っている心情を、よく想像することができます。また、Aさんの

優しさが垣間見える言動に、以前より気づくことができていると感じます。

【5. 活動を通して得た学び】

対面交流までの準備は、結構大変でした。多大なサポートを受けつつですが初めての遠出だったので、特に鉄道や夜行バスの予約は慎重にしました。その体験から、一瞬で繋がることができる zoom は、とても便利なツールであることを実感しました。しかし、後日 A さんや金山中学校の先生からいただいた手紙から、わざわざ対面で会うことを、特別な行事として大事にしてくださっていることを知りました。また、対面で会うことで、活動の成果で書いたような、様々な発見をしました。A さんがいる場所の気温を感じたり、A さんが立って行動しているところを見たりすることは、zoom の小さい画面では感じ取りにくい事でした。このことから、遠隔の交流も、対面交流も、それぞれ利点があることを知りました。

【6. これからの活動について】

普段 zoom 交流をしている他のメンバーは日程が合わず、今回は私一人で行くことになりました。しかし、ぬいぐるみ撮影や思い出の共有を通して、メンバーにも旅行気分を味わえるようなカバーをしました。次は、メンバーと A さんとの仲を深めるために、春休み等を利用して、金山に再度訪問したいと考えています。これからも、普段は zoom で交流し、たまに対面で会うという、お互いに無理なく有意義な交流ができるよう、zoom と対面を使い分けていきたいと考えています。



N・E・O フェス * Kawaii 華道体験レッスン

活動実施日：2023.2.18(土) 11:00~17:00

活動場所：戸塚モディ 2 階

文学部芸術学科 1 年 石井 優衣

【活動内容・目的・背景】

明治学院大学もある戸塚での地域交流の機会を作ることと、日本の芸術への関心を深めてもらうことを目的とした華道教室を開催しました。今回は、形式に従った文化体験ではなく、「Kawaii 華道」というコンセプトのもと、お花を自由に生けることができるという、親しみやすさを重要視した日本文化体験教室でした。そのため当日は、ご高齢の方から小さい子どもまで、幅広い世代の方に体験していただきました。



交流の様子

当日の流れとしては、好きな花器と花材を選んでもらい、自由に生けた後、「Kawaii 華道」の醍醐味である好みの装飾品で作品をさらに飾りつけてもらいました。特に小さな子どもたちは飾りつけの工程を楽しみながら作品を制作していました。また、今回のこの教室では生けた花はラッピングをしてプレゼントさせていただきました。その際、地域の方と沢山お話することができました。

全体としても、華道という芸術を通して、コミュニケーションが活発な体験教室となりました。

【活動を通して得た学び】

今回このボランティアを通して、芸術は鑑賞するだけのものではなく、コミュニケーションのきっかけになることを実感しました。具体的には、お互いの作品を見て感想を伝えあう、お花に関するエピソードについての会話が生まれました。親子で参加された方も、二人で楽しく会話をしながら制作していました。また、参加した方が笑顔になっている所を見て、自分の得意なことは、使い方を工夫す



レッスンの様子

ると人のためになること、そのように案外身近にボランティアがあったことに気が付きました。

【地域コミュニケーションについて】



レッスンの様子

今回のように地域交流を主な目的とするとき、地域という括りには幅広い世代がいる中で、すぐに交流することはなかなか難しいことであると思います。しかし、今回のボランティアのように芸術というきっかけがあれば、幅広い世代が集まり、さらに自然にコミュニケーションが生まれます。そのため、芸術に関するボランティア活動は地域交流にとって欠かせないものであると考えます。今後も

ぜひ、この活動を続けていきたいです。

*N・E・O フェスとは、全国のマルイ、モディ各店で実施している、あたらしくて、地球にやさしいインクルーシブなイベントです。

2022年11月3日&4日

画面を通してではなく直接の交流を! ~OPENROOM 岐阜訪問~



岐阜県下呂市立竹原小学校, 金山小学校

毎月1.2回程度オンライン交流をしている特別支援級の小学生たち10名にOPENROOMのメンバー11名で、岐阜に直接会いに行きました。

竹原小学校では小学生側からは下呂の紹介、学校案内をしてもらい、大学生側は風船リレーと手作り神経衰弱を用意しました。

金山小学校では、小学生側からは学校案内、大学生側は風船リレーを用意しました。

ボルダリング、鬼ごっこ、ミナモダンスも交流中に行いました。普段は画面を通してでしか交流できないため、実際に会うことが出来て、学生も小学生も興奮気味でした。

どちらの小学校での活動も、笑顔溢れる楽しい時間でした!

また、小学生たちが普段どんなところで暮らしているのかを知るためにも、下呂温泉街での散策や、筋骨めぐりなども行いました。



ミナモダンスの様子

竹原小学校とは1年前から、金山小学校は今年度からオンラインで毎月交流を重ねています。

直接会えたことをOPENROOMのメンバー、小学生、先生方も含め皆で喜びました。

画面を飛び出し、直接の交流ができたことはかけがえのない経験になったと実感しています。



大学生からプレゼント♡

実際に小学生と対面し、オンライン交流ではできなかった活動を行えたことで、小学生たちと学生との心の距離が縮まり、今後のオンライン交流も、今までより心の距離が近い状態で、より楽しく行えると感じています。

小学生たちが普段どんな場所で生活し、どんな教室でどんな風に勉強しているのかを肌で感じられたことは、今後のオンライン交流の方法や企画でも、沢山生かすことができると思っています。



下呂駅記念撮影



小学校案内の様子



筋骨めぐり



任意団体ボランティアサークル OPENROOM

多文化共生スポット ワールドキッズ クリスマス会 明石留美子ゼミ

活動実施日：2022 年 12 月 17 日

活動実施の場所：根岸中学校コミュニティハウス

活動内容：

これまでゼミで行ってきた学習支援の延長として、横浜市の根岸中学校を拠点に活動されている多文化共生スポットワールドキッズと共同してクリスマス会を開催し、外国にルーツを持つ子どもたちの居場所作りやコミュニティ参加を目的としたレクリエーションやアクティビティを行った。11 月下旬ごろから、学習支援教室の際に子どもたちへアナウンスを行い、クリスマス会の参加者は 23 名ほどだった。

当日はビンゴ大会やリースづくりなどを通して、子どもたち同士で絆を深め、チームワークを育む支援を行った。ビンゴ大会では子ども達自身が司会進行を務め、参加した子ども達は私たち支援者のサポートを受けつつ周りの子と番号を確認し合い協力する姿が見られた。初めは支援者を含め子ども達も戸惑った様子が多々みられたが、終盤では慣れてきたこともあり支援者と子ども達や子ども達同士、楽しい雰囲気で行うことが出来た。リース作りでは子ども達の自由な発想を最大限に活かせるように飾りつけパーツの付け方や配置は指定せず子どもたちに自由に飾り付けを行ってもらった。スケジュールの関係でその場で完成は出来なかったが、各自家に持ち帰り飾り付けを行って貰った。支援者はイメージが中々湧かない子や細かい作業等をサポートしている姿がみられた。また、子ども達はお互いに飾り付けについて話し合い協力する姿も見られた。ゼミとしては、試行錯誤しながらもゼミでの多様性の学びを活かし、施設の人々と子どもたちとの関わりをサポートすることに努めた。

想定外の出来事として、学習者間での喧嘩もあったが、我々の介入もあって、ことなきを得た。

結果的にすべては想定通りには進まなかったが、子どもたちのコミュニティ参加を促すことができた。子どもたちや施設の人たちからも好評であり、クリスマス会は成功を収めた。

活動を通して得た学び：

まず、学習支援研究や準備段階において子どもたちに対してどのようなアプローチをすればいいのかを研究し、学ぶことができた。クリスマス会を行うまでの支援の中で、言語の壁においてやさしい日本語でのアプローチや子ども達の自発性を尊重する接し方、支援者としてどこまで介入するべきかといったアプローチの仕方をクリスマス会に向けて準備した。具体的にはビンゴ大会やリース作りにおいて、子ども達同士のコミュニケーションを大事にしつつも、優しい日本語でサポートをしたり、子ども達が行うには少し困難な細かい作業をサポートした。また、子どもたちの目線に立ったアイデアを、気持ちを理解した上で提案することができた。

そして、クリスマス会本番にその学びを活かして実践することができた。クリスマス会では支援者の人数が普段より多く、一人一人とまではいかなくとも限りなく個別にサポートするこ

とが出来た。また、ビンゴ大会では開いた数字の確認、リース作りでは細かい作業やアイデアの提案を皆が積極的に行うことが出来た。その一方で子どもたちのコミュニケーションを大事にすることを意識した結果、トラブル等に関して深く介入することが出来なかった点もある。想定通りにうまくいったことと、思うようにいかなかったことがあったが、研究したことが必ずしもうまくいかないということを学べたこともまた良い経験であった。

クリスマス会の準備や実践で得た子どもたちへの接し方をゼミでの研究に活かしたいと考えている。

クリスマス会を行うことで外国にルーツを持つ子どもの助けになりたいという目的があった。クリスマス会は子どもたちや施設の方々からも好評であり、成功を収めたため、この目標は達成できた。



「GOCA CAFÉ 日本語で話そう」 「おおた桜本なわたしたち」

社会学部社会学科 2 年 金 滉基
社会学部社会学科 2 年 安藤 帆波
社会学部社会福祉学科 2 年 高橋 亜依子

活動実施日

2023 年 3 月 4 日（土）

活動実施の場所

おおた国際交流センター（東京都大田区蒲田 4 丁目 16-8 2 階）

活動内容：

言葉の問題や、日本での人間関係の構築に関する困難などの悩みを抱える、大田区に住む外国にルーツがある人が、今回の活動で行うイベントを通し、日本語の理解を深め、似た境遇の外国にルーツがある人との交流を図ることを目的として行った。今回のイベントはおおた国際交流センターで月に 1 回行われている「GOCA CAFÉ」での一回の企画・運営をおおた国際交流センターの職員の方と共同で行った。私たちはすごろくという日本でメジャーなゲームを改良し、すごろくを行いながらトークイベントをすることを企画した。自作のすごろくを作り、すごろくの各マスに書いてあるその人についての質問について答えることで、日本語を実際に使用し、学びながらお互いの交流につなげることを目的とした。例えば、マスには「最近おぼえたことば」や「一番ほめられたこと」などその人について知ることのできる内容を付した。そうすることで、外国にルーツを持つ人々と日本の人々が日本語を使って交流した。

活動を通して得た学び：

参加者と話す中でいろいろな学びがあった。たとえば、モンゴルでは正月にあたるのは 2 月で、しかも毎年その日が変わるということなど、ここに参加していなければ決して日本の「正月」を相対化できていなかった。そのような点においてただ単に「異文化理解」や「多文化共生」を掲げるのではなく、実際に対象となる人々との対話なしにはこのような施策もどこか虚しく響くものでしかないを実感した。それと同時に、日本に住む苦勞なども知る機会となった。ある方は「仕事がない」と笑顔で語っていたが、かなり深刻な問題であると言える。今回「GOCA CAFÉ」を手伝ってくださったおおた国際交流センターのような、地域に根ざすコミュニティの果たす役割は大きいと感じた。それをただ傍観者として見ているだけでなく、「共に作り上げていく者」としての責務が日本に住む人々にはある。

今回の参加者は日本語能力にバラつきがある。日本人と、日本語をスムーズに話すことができる外国人、そしてまだあまり日本語が話せない外国人の間で、円滑にコミュニケーションをとることは難しかった。しかし、こういった言葉や方法であれば伝わりやすいのか、自分の伝

えたいことは何と言って伝えればよいのかと考えてお互いコミュニケーションをとることは、その場にいた全員にとって多文化共生の実践になったのではないかと感じる。円滑にコミュニケーションをとることと同じくらい、相手のことを考えて伝えるということは重要だ。

そして自分を知ってもらうことと相手を知ることが楽しいものだ気が付いた。今回のすごろくの感想を見てみると、「相手の話を聞いて楽しかった」という声がいくつかあった。話すことで自分を表現でき、聞くことで相手を知ることができるが、言語能力に差があるとその機会がどうしても少なくなってしまう。だからこそ、大田区のみんなが参加できる「GOCA CAFÉ」で、話すことを目的としたすごろくをやるのは多文化社会を望む人にとって良い場であったと感じた。

活動を通した課題

- ・参加者を集めるのが難しかった。予想人数は7～10人だったが、参加したのは4人だった。今回はチラシやおおた国際交流センターの方たちの呼びかけで参加者を募ったが、もう少し外部に周知させる方法を考える必要があると感じた。
- ・参加予約の人数は8人だったが、当日の参加者は4人だった。時間通りに来た人も半分だった。時間や約束事への価値観は国によって違いが生じるため、グループ決めや始まる時間などへの柔軟な対応力が求められる。また、今回行ったすごろくは途中参加が難しいものであったため、いつでも参加できるものであるとより良いと考える。



参加者の方（左2）と企画者の記念撮影



会場の準備を進める様子



「GOCA CAFÉ」看板（左）と企画者作成のチラシ（右）

7. 1 Day for Others (1 日社会貢献プログラム)

(1) 総括

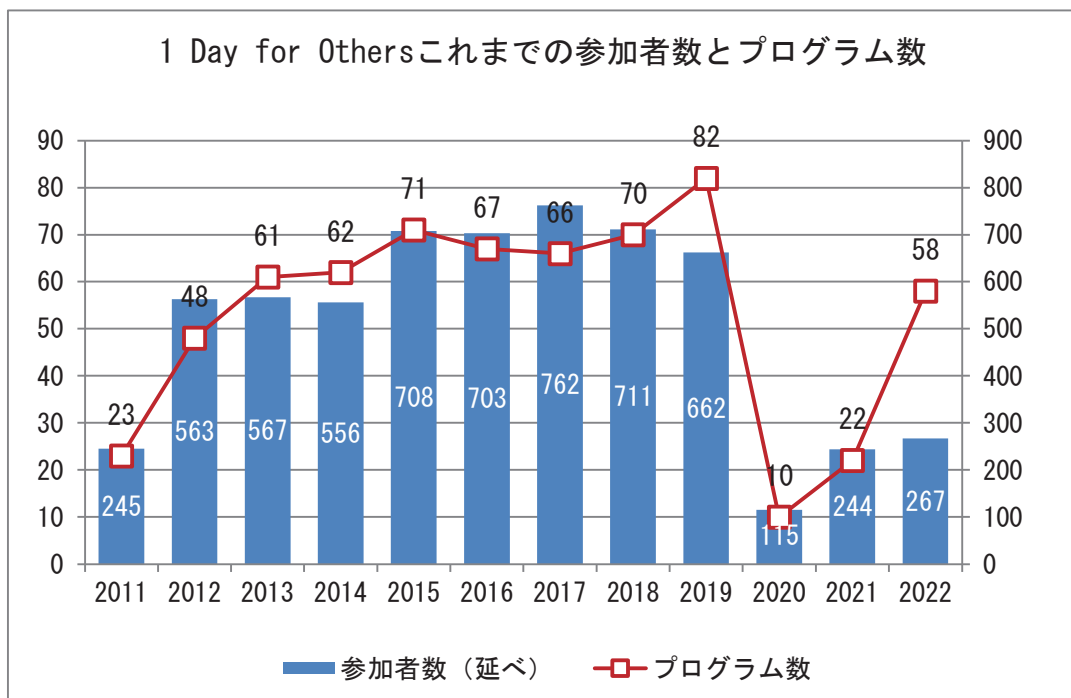
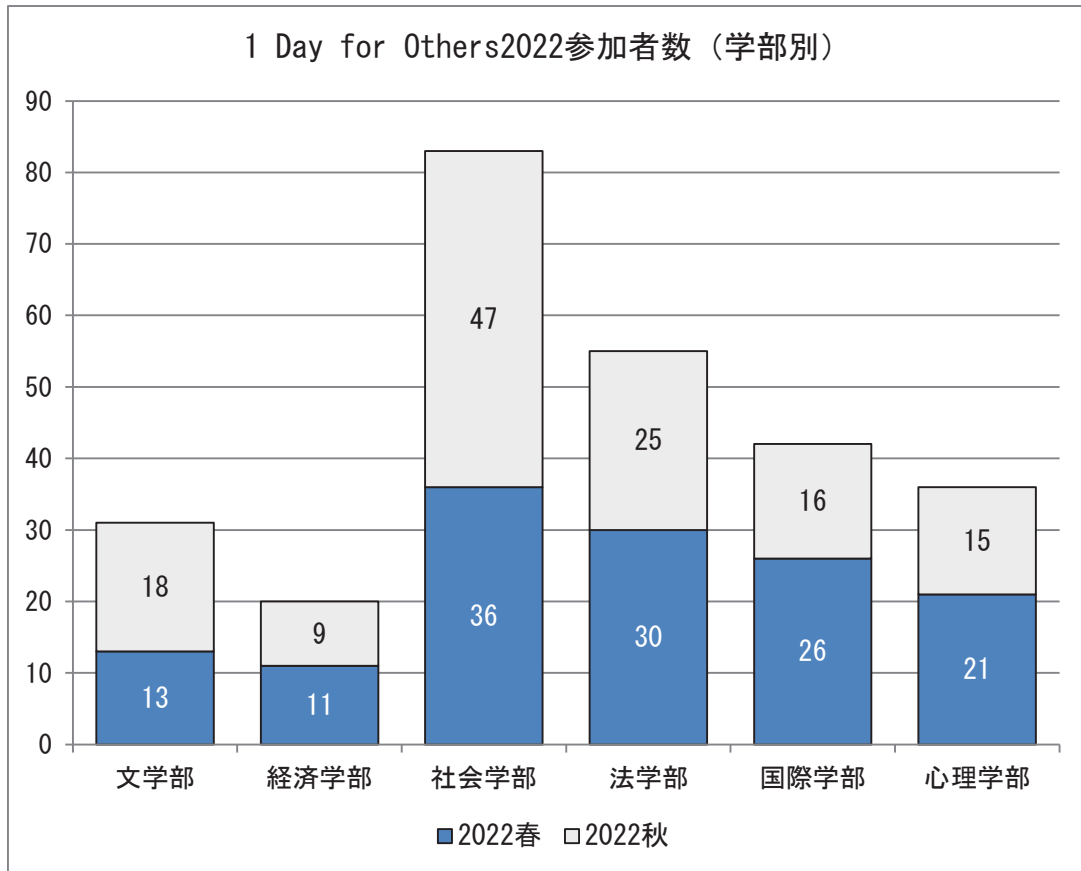
2022 年度の「1 Day for Others」は、年間 58 プログラムを実施し、延べ 267 名の学生が社会貢献活動を体験した。社会情勢に合わせ、感染対策と体調管理を徹底したうえで、対面でのプログラムも再開し、オンラインプログラムが中心であった過去 2 年に比べて、プログラム実施数および参加学生人数を増加することができたこと、なにより、現場で学生が活動する機会を提供できたことは、大きな成果と言え、学生の受入に尽力いただいた受入団体の皆様に改めて感謝申し上げたい。

一方で、プログラム時間の短縮や募集定員枠の縮小、職員のプログラム同行など、密を避けるための感染対策として、一部制約のある実施体制をとったことで、学生への機会提供という意味では、引き続き限定的にせざるを得ず、ボランティアプログラムに主体的に参加したいという学生のニーズをすべて網羅することが出来なかったことは、次年度の課題と言える。上記課題解決と現状把握のために、2023 年 1 月 17 日から 2 月 24 日に本学学生に向けたプログラムの認知度とニーズを問うアンケート調査をおこない、104 名の学生より回答を得た。

そのアンケート調査の中で「1 Day for Others を知っているか」という問いに対し、「知っている」「聞いたことはある」と答えた学生は 84 名と全体の 8 割に上ったが、「参加経験」を問う設問に対して、1 回以上プログラムに参加したことがある学生は 32 名に留まり、学生の認知度と参加率が必ずしも一致していないことが分かった。「1 Day for Others に参加したいか」を問う項目では「参加したい」「予定が合えば参加したい」と答えた学生が回答者の 9 割以上に当たる 96 名に上り、アンケートに回答したのがボランティアに関心のある学生たちということを差し引いても、大変高水準であることがうかがえる。同アンケートでは、興味のあるボランティアの内容やプログラムの実施時期の要望なども聞いており、実施時期の要望では、長期休暇中のプログラム実施の要望が多かった。学生のニーズとプログラムの実態をマッチさせていくためにも、今後のプログラムづくりの参考としたい。

2023 年度については、新型コロナウイルスの扱いを感染症 5 類に移行する方針が政府より示されている。「1 Day for Others」についてもアフターコロナのステージを迎えるが、新たに生み出した「オンラインプログラム」や「感染対策管理」などの財産も加え、受入先団体と学生のニーズもより組み込んで、プログラムの裾野が広がり、より多様でバラエティに富んだかたちで本格再開することができるよう、プログラム実施に向けて準備を進めていきたい。

(職員 青木 洋治)



(2) 実施プログラム一覧

< 春学期 >

NO	企業および団体名	プログラム名	実施日	参加者 (名)
1	特定非営利活動法人 スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米づくり体験～田起こし編～	4/30	4
2	特定非営利活動法人 スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米づくり体験②～代かき編～	5/14	2
3	特定非営利活動法人ワールドランナーズ・ジャパン事務局	チャリティーリレー for Africa	5/15	5
4	特定非営利活動法人 銀座ミツパチプロジェクト	銀座の屋上でサツマイモを植えよう！	5/17	7
5	有限会社 ネパリ・バザー口	フェアトレードの現場を体験！	5/20	4
6	特定非営利活動法人 スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米づくり体験③～田植え編～	5/21	4
7	逗子フェアトレードタウンの会	若い力でフェアトレードタウンをもりあげよう！	5/21	4
8	港区社会福祉協議会、チャレンジコミュニティクラブ	全ての人が暮らしやすい街を！～港区バリアフリーマップ作成～	5/26	3
9	公益社団法人 シャンティ国際ボランティア会 (SVA)	海外の絵本の不足している地域に絵本を届けよう～本の力を、生きる力に～	5/27	9
10	横浜市立倉田小学校	小学校の遠足をお手伝いしよう！（※雨天のため、授業支援に変更）	5/31	3
11	おっち一塾	フリースクールの子どもたちと触れ合う	6/4	6
12	横浜市立倉田小学校	小学校の遠足をお手伝いしよう！	6/10	5
13	社会福祉法人 興望館	学童の子どもたちと思い切り遊ぼう！	6/10	2
14	久地円筒分水サポートクラブ	住宅街にも国の登録文化財はある！円筒分水、広場の美化活動に参加しよう！！	6/11	3
15	芝の家	多世代交流拠点「芝の家」を体験しよう。	6/17	4
16	100 人のお産展実行委員会	パパ・ママが展覧会をゆっくり見るサポート！子どもと展覧会場を楽しもう！午前の部	6/18	2
17	100 人のお産展実行委員会	パパ・ママが展覧会をゆっくり見るサポート！子どもと展覧会場を楽しもう！午後の部	6/18	2
18	横浜山手中華学校	中華学校の子どもたちと、SDGs をテーマにゲームやクイズで一緒に遊ぼう！	6/20	9
19	学生手話団体 orange	やってみよう！1 日でできる手話講座	6/25	24
20	特定非営利活動法人 地球の木	ラオスに絵本を届けよう～本と出会い、自分の世界を広げよう～	7/7	7
21	戸塚区地域子育て支援拠点ととの芽	ととのの芽でふたごみつごと遊びながら、地域の子育て支援の現場を知ろう！	7/23	1
22	特定非営利活動法人国際連合世界食糧計画 WFP 協会	エッセイを書いて、給食を届けよう！	8/1	9
23	特定非営利活動法人シャプラニール = 市民による海外協力の会	国際協力 NGO の現場で、フェアトレードのお手伝いをしよう！	8/25	2
24	バンコク YMCA パヤオセンター	タイの TEENAGER と交流しよう！	8/28	10
25	港区立麻布子ども中高生プラザ	子ども達といっしょに思いっきり遊ぼう！	8/30	6
		計		137

< 秋学期 >

NO	企業および団体名	プログラム名	実施日	参加者 (名)
1	高輪地区高齢者相談センター	ケアマネージャーの方たちと一緒に高齢者を支える地域活動を考えてみよう	9/28	4
2	柏尾川魅力づくりフォーラム	みんなで川をきれいに！「柏尾川清掃」	10/2	4
3	ぎふちょう金山（就労継続支援 B 型事業所 下呂市障がい者就労支援センター）	岐阜県の作業所で働く皆さんと秋の思い出を作ろう！	10/3	2
4	ファイバーリサイクルネットワーク（FRN）	日本の着物文化を再活用する「秋のリサイクルきものフェア」午前の部	10/5	3
5	ファイバーリサイクルネットワーク（FRN）	日本の着物文化を再活用する「秋のリサイクルきものフェア」午後の部	10/5	3
6	特定非営利活動法人 スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米づくり体験～脱穀編～	10/15	4
7	特定非営利活動法人 銀座ミツバチプロジェクト	銀座でサツマイモ掘り！①	10/19	6
8	特定非営利活動法人 銀座ミツバチプロジェクト	銀座でサツマイモ掘り！②	10/20	5
9	特定非営利活動法人 国際交流ハーティ港南台	日本語学習ボランティア～様々な国の方々と国際交流をしよう～	10/28	4
10	神奈川県立地球市民かながわプラザ（あーすぷらざ）	あーすぷらざのハロウィンイベントで子どもたちと遊ぼう！	10/29	8
11	特定非営利活動法人 スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米づくり体験～荒起こし編～	11/12	3
12	湘南とつか YMCA	上倉田キャンドルナイト「キャンドルホルダーライトづくり」①	11/18	4
13	NPO 法人 みなと外遊びの会、チャレンジコミュニティクラブ	子どもたちの冒険遊び場 プレーパーク 高輪森の公園①	11/20	2
14	認定特定非営利活動法人 JUON NETWORK（樹恩ネットワーク）	多摩の森・大自然塾	11/20	4
15	湘南とつか YMCA	上倉田キャンドルナイト「キャンドルホルダーライトづくり」②	11/24	2
16	認定特定非営利活動法人 JUON NETWORK（樹恩ネットワーク）	割り箸から考える SDGs ～ Do you know 樹恩割り箸@明学？～	11/25	8
17	東日本旅客鉄道株式会社	高輪の街をもっと好きになろう	11/26	4
18	特定非営利活動法人 マドレボニータ	大学生から学ぶワークライフバランス～産後の社会課題を見据えて～エクササイズ・対話のワーク、講座	11/26	9
19	横浜市スポーツ協会 戸塚スポーツセンター	上倉田キャンドルナイト「キャンドルホルダーライトづくり」	11/27	3
20	NPO 法人 みなと外遊びの会、チャレンジコミュニティクラブ	子どもたちの冒険遊び場 プレーパーク 高輪森の公園②	11/27	2
21	港区社会福祉協議会、チャレンジコミュニティクラブ	全ての人が暮らしやすい街を！～港区バリアフリーマップ作成～	11/30	3
22	特定非営利活動法人 舞岡・やとひと未来	開園 30 周年企画舞岡公園でのウォークラリー	12/3	5
23	戸塚桜セーバー	柏尾川プロムナード花壇の花植え	12/3	5
24	チャレンジコミュニティクラブ	港区赤羽小学校 昔遊び授業支援準備	12/12	1
25	港区立赤羽小学校、チャレンジコミュニティクラブ	港区赤羽小学校 昔遊び授業支援	1/17	2

26	特定非営利活動法人イランの障害者を支援するミントの会	国際協力団体の活動を紹介する！！～ワークショップ、出展を通じて広報を手伝う～①	1/27	2
27	特定非営利活動法人イランの障害者を支援するミントの会	国際協力団体の活動を紹介する！！～ワークショップ、出展を通じて広報を手伝う～②	1/28	2
28	特定非営利活動法人イランの障害者を支援するミントの会	国際協力団体の活動を紹介する！！～ワークショップ、出展を通じて広報を手伝う～③	1/29	1
29	横浜山手中華学校	横浜中華街で春節を飾ろう！	2/7	9
30	港区立エコプラザ	エコプラザ紹介・見学会！～公共施設の業務を知る～	2/10	4
31	戸塚区民文化センターさくらプラザ	さくらプラザ 春の芸術祭 2023 ホールイベント	3/12	2
32	港区立エコプラザ	エコプラザ屋上菜園で緑化活動！土づくり作業を体験しよう。	3/14	6
33	芝の家	多世代交流拠点「芝の家」を体験しよう。	3/22	4
			計	130

8. ボランティア・カフェ（通称：ボラカフェ）

（１）総括

「ボランティア・カフェ（以下ボラカフェ）」は2020年度のコロナ禍における模索の中で、自宅から参加できるオンライン対話の場「おうち de ボラカフェ」として始まった。昨年度まではオンライン開催が中心であったが、2022年度は全7回を対面で（オンライン参加とのハイブリッド型を含む）開催することができた。

2022年度の特徴の一つは、オール明治学院による中高大連携プログラムの一環として、中高生にも参加を呼び掛けたことである。これまで中高大連携によるボランティアプログラムは、タイのパヤオセンターへの支援に関するプロジェクトに限定されていたが、コロナ禍でタイへの訪問が困難となる中で、まずは身近なところから中高生も大学生と共に、様々な社会課題に出会ってもらいたいとの思いで企画した。しかしながら、実際には生活時間や行事などが中学・高校と大学とでは大きく異なり、実際の参加者数にはなかなか結び付かなかった。特に東村山の中学・高校から生徒たちが参加することは難しかった。

2022年度のもう一つの特徴は、学生による企画があったことである。学生自身が活動している市民団体からゲストを呼んで話を聞き、ゲストをよく知る学生と一般の学生との対話の場づくりも学生が行ったことで、参加者はボランティアをより身近に感じることができ、数名がその後、実際のボランティア活動に参加するようになった。

また、昨年度に引き続き国際学部の横浜国際学会（YISA）との共催で、クララ・ラウンジでの写真展と連動企画としてのボラカフェを行なった。

（ボランティアコーディネーター 磯野 昌子）

開催日	タイトル	ゲスト	参加数
4/22（金） 17:00-18:30	「ザ・トゥルーコスト」上映会 &トーク		17名
5/18（水） 13:30-15:00	贈り物を通して、心に寄り添う ～精神科入院を支える Thoughtful Gift の活動～	一般社団法人 Thoughtful Gift 代表 菊池 菜々子氏／ 理事 中島 愛氏	18名
7/14（木） 第一部： 12:55-13:30 第二部： 13:40-14:30	<中高大連携> ルワンダで義足をつくる ～虐殺の歴史を乗り越えて～	ムリンディ／ジャパン ワンラブ・プロジェクト ルダシングワ 真美氏	第一部 44名 第二部 14名
10/5（水） 13:30-15:00	Health for All『いのちの格差』に取り組む	（認定）特定非営利活動法人 シェア＝国際保健協力市民の会 東京事務局 海外事業担当 西山 美希氏	8名
11/29（火） 15:40-17:00	<中高大連携> 環境保全と経済開発は両立できるのか？ ～ボルネオ島の熱帯林からSDGsを考える～	特定非営利活動法人 ボルネオ 保全トラスト・ジャパン 青木 崇史氏	5名
11/30（水） 15:40-17:10	<中高大連携> HIV と生きる	（認定）特定非営利活動法人 ふれいす東京 加藤 力也氏	7名
12/7（水） 15:15-16:45	写真は語る ～STAND Still 写真展からみる非言語表現がもたらすもの～	フォトジャーナリスト／Picture This Japan 大藪 順子氏	8名

(2) ボランティアカフェ報告（サポート学生の学年は 2022 年度当時）

[ボラカフェ・シネマ] ファッション・レボリューションデイ関連企画
「ザ・トゥルーコスト」上映会&トーク

2022 年 4 月 22 日(金) 17:00 ~ 18:30

ボランティアセンター（横浜）コラボレーションスペース

参加者：17 名

内容

2013 年 4 月 24 日、バングラデシュのファストファッション・メーカーが多く入っていたビルが倒壊し多数の死者が出た。その後、衣服生産者の安全管理や人権の扱いが問題になり、ファッション業界を変革するための「ファッション・レボリューションデイ」が始まった。4 月のボラカフェでは、その関連企画としてファストファッションの問題を扱った映画『ザ・トゥルーコスト』を鑑賞し、グループごとに感想の共有と私たちは何ができるのかを話し合った。

参加者の声

◎華やかなファッション業界に隠された環境問題を映画という形で学ぶことができ、とても勉強になりました。鑑賞後の、ディスカッションでも自分以外の人の意見を聞くことで、さらに内容が深まったし、新たな意見を持つことができました。

◎安い価格でオシャレが楽しめるファストファッションには魅力を感じるけれども、その裏では日々命や生活を犠牲にして必死に働いている方々がいることを知り、この問題は世界中の人に関わる問題であり、解決をしなければならない責任も感じました。

サポート学生

二見 朋香（フランス文学科 4 年）

ボラカフェ・シネマ
in Volunteer Center
ファッション・レボリューションデイ関連企画
「ザ・トゥルーコスト」上映会&トーク

期日 2022年4月22日(金) 17時00分~18時30分 (5限)
上映タイトル
「ザ・トゥルーコスト ファストファッション 真の代償」

2013年4月24日、バングラデシュのファストファッション・メーカーが多く入っていたビルが倒壊し多数の死者が出た。その後、衣服生産者の安全管理や人権の扱いが問題になり、ファッション業界を変革するための「ファッション・レボリューションデイ」が始まった。4月のボラカフェでは、その関連企画としてファストファッションの問題を扱った映画『ザ・トゥルーコスト』を鑑賞し、グループごとに感想の共有と私たちは何ができるのかを話し合った。

参考：ザ・トゥルーコスト ファストファッション 真の代償 公式サイト
<https://unitednations.jp/truecost/>

当日の流れ
17:00~17:10 キャンペーンと映画の紹介
17:10~18:00 映画上映 (90分の映画の前半を鑑賞します)
18:00~18:25 トーク「真の代償とは？」
18:25~18:30 次回の告知

対象 大学の学生、教職員
定員 20名
場所 ボランティアセンター（横浜）
サポート学生 二見朋香（文学部文学科4年）
申込方法 ボランティアポータルサイト
<https://volunteer.maijagakuin.ac.jp/>

QR「ボラカフェ」企画メンバー募集
「ボラカフェ」は、ボランティア・センターが主催する、学生・教職員・社会人・企業・団体など、誰でも参加できるイベントです。ボランティア・センターは、ボランティア・センターを運営しています。詳しくは、お問い合わせください。

E:volunteer@mai-jagakuin.ac.jp 電話: 04-5221-3111 携帯: 045-868-2256

贈り物を通して、心に寄り添う ～精神科入院を支える Thoughtful Gift の活動～

一般社団法人 Thoughtful Gift 代表 菊池 菜々子／同理事 中島 愛

2022年5月18日(水) 13:30～15:00

ボランティアセンター（横浜）コラボレーションスペース

参加者：18名

内容

一般社団法人 Thoughtful Gift は、精神科病院へ入院する際に必要な物資を無償で提供する活動をしている。講師より、誰もが精神障害を患う可能性や、精神科病棟の様子、入院時の体験から活動を興こすまでについて話を聞き、参加者はグループごとに感想を共有して質疑応答を行った。サポート学生の進行により、参加者は対話する時間が長かったことで満足度の高さがうかがえた。

参加者の声

◎活動の内容に加えて、精神疾患と精神病院などについても理解を深めることができたととても勉強になりました。また、今回のイベントに参加できたことで、人と人の繋がりが多くの人を救えるということを改めて実感することができました。

◎精神疾患は遠い存在ではなく、誰にでも起こりうる身近な存在であることを学び、精神疾患についてもっと深く知りたいという気持ちになりました。また、自分がやってみようと思ったことを実際に行動に移すことの大切さを今回のボラカフェで学びました。

◎「自分が必要だと思うことをする」とおっしゃっていましたが、この言葉が特に心に響きました。人それぞれ足りない部分に手を伸ばしあって補っていけることが理想だと思ったので、これを機に自分にできることを実践してみたいです。

企画・サポート学生

小室 閑（心理学科2年）



< 中高大連携 >

ルワンダで義足をつくる ～虐殺の歴史を乗り越えて～

ムリンディ／ジャパン ワンラブ・プロジェクト ルダシングワ 真美

2022 年 7 月 14 日 (木) 第一部：12:55 ～ 13:30

第二部：13:40 ～ 14:30

白金校舎 2302 教室

参加者：第一部 44 名／第二部 14 名

内容

大学卒業後 OL をしていた真美さんは、ケニア留学中に現在の夫ガテラさんに出会う。来日中、ガテラさんが着用していた歩行用装具が壊れ、神奈川県義肢製作所を訪れたところ、その技術の高さに感銘した真美さんは、ガテラさんの祖国ルワンダに技術を普及することを目標に、自ら義肢装具士になることを決意し、国家資格を取得した。

その間の 1994 年、ルワンダでは民族対立が悪化し大虐殺が起きる。約 100 万人が命を落とし、鉋や斧で手足を切り落とされたり、手榴弾に吹き飛ばされたりして多くの人が障がいを負った。その惨状を目の当たりにした二人は、1997 年にルワンダの首都キガリに義肢製作所を設立。NGO「ムリンディ／ジャパン・ワンラブ・プロジェクト」を立ち上げ、これまで約 1 万人に義足や装具、杖、車いすなどを無償で提供してきた。

しかし、2019 年末のクリスマスに降った豪雨によって一部が倒壊。翌年 2 月には政府によって、立ち退き命令と強制的な取り壊しにあってしまう。

初めて明治学院中高大連携で、対面とオンラインとの併用で開催されたボラカフェであったが、参加者の誰もが、数々の苦難に立ち向かう真美さんの姿に力づけられたにちがいない。



参加者の声

- ◎建物内を流れる洪水、ショベルカーによる解体の動画に息をのんだ。最後には、近隣の住民たちが力を合わせて歌いながら建物の再建に取り組んでいる様子に感動した。
- ◎困難な中でも自然体な真美さんは格好いい。

サポート学生

金井 和音（経営学科 4 年）

山口 恭平（消費情報環境法学科 4 年）

Health for All『いのちの格差』に取り組む

（認定）特定非営利活動法人 シェア＝国際保健協力市民の会 東京事務局
海外事業担当 西山 美希

2022年10月5日(水) 13:30～15:00

ボランティアセンター（横浜）コラボレーションスペース

参加者：8名（学生5名 教職員3名）

内容

西山さんは、明治学院大在学中、授業の海外スタディーをきっかけにタイに関心を持つようになったという。卒業後、旅行代理店に4年ほど勤めたものの、やはり「途上国」の問題にかかわりたいと思いシェアの活動に参加し、働くようになった。

シェアでは、まずタイでの健康問題、特にHIV/AIDSに関する支援に関わった。その後、タイが中進国となりプログラムを自力で運営できるようになったことから、タイの支援は終了。今は、東ティモール、カンボジアでの活動のほか、日本に居住する外国人の支援をおこなっており、特に母子保健に力を入れている。

東ティモールでは、遠いところに行かなければ診療を受けられない地域に診療所を建設したり、地元の保健関係者に対する研修をおこなったりしている。

カンボジアでは、離乳後の幼児にお粥しか与えず栄養失調状態になることが多い。だが、親がその食事に健康上の問題があると知らず、気づかないこともある。そうした地域では、子どもの栄養に関する情報を提供するために、紙芝居を使うなどして伝える工夫をしている。

日本国内でも外国人は言語の問題などから保健情報へのアクセスが難しい。国によっては乳幼児を沐浴させる習慣がないが、蒸し暑い日本では沐浴の必要があることを伝え、その方法を人形とたらいを使って教えたりしている。



参加者の声

- ◎新しく途上国について学べただけでなく、インターンなど就職に関してのことも知れてよかったです。今後の就活について参考にできました。
- ◎「健康を脅かされているのは誰か」という問いを考えることによって、自分では気づかなかった視点で物事を見ることができ視野が広がった。

サポート学生

松田 実久（国際学科2年）

< 中高大連携 >

環境保全と経済開発は両立できるのか？ ～ボルネオ島の熱帯林から SDGs を考える～

特定非営利活動法人 ボルネオ保全トラスト・ジャパン 青木 崇史

2022 年 11 月 29 日(火) 15:40 ～ 17:00

白金校舎 1251 教室

参加者：5 名（学生 4 名 教職員 1 名）

内容

認定 NPO 法人ボルネオ保全トラスト・ジャパン（BCTJ）は、東南アジアのボルネオ島で多様な動植物の生息地である熱帯雨林を保護し、生物多様性を保全する活動を行っている。今回のボラカフェでは、初めに、BCTJ の青木さんより、ボルネオ島の地理や歴史、熱帯林のしくみや熱帯林に生息する動植物、植民地開発の歴史とパーム油を使用した私たちの暮らしについて、さらに、エコツアーなど BCTJ の活動について、スライドを見ながら話を聞いた。

また、森林保護と経済的開発の狭間でゆれるボルネオの現状をフィクションにしたロールプレイ・ワークショップを通して、自分たちにできることを考えた。フィクションでは、幼少期をボルネオの森で過ごし、商社で働く母の姿に憧れて自身も商社に就職し、熱帯林の破壊と開発の狭間に立たされた女性の立場にたって、どうすべきかをグループで検討した。

参加者の声

◎みんなと一緒に討論できて、よかった。経済発展か環境保全か、立場によって考えが違うので、もっといろんな目線で考える必要があると思う。

◎ボルネオの動物や植物が、人類の発展によって減少してしまうことは、非常に心苦しいものと感じた。私は動物や自然が好きだが、現地には生活を豊かにしたいという住民もいる。私は、両者のバランスが大切だと思った。プランテーションを全く作らないというのは、これからの国際社会の潮流に鑑み、不可能だろう。しかし、島全部の自然を破壊してプランテーションを作るというのは、各方面に配慮がなされていない。ルールをしっかりと決めて運営していくことで、島の発展にも繋がるし、生物多様性も守られると思った。



< 中高大連携 >

HIV と生きる

(認定) 特定非営利活動法人 ふれいす東京 加藤 力也

2022 年 11 月 30 日(水) 15:40 ~ 17:10

白金キャンパス 1305 教室

参加者: 7 名 (学生 3 名 教職員 4 名)

内容

2016 年発表の平均余命調査では、一般住民 80 歳に対して 2010~15 年に診断を受けた HIV 陽性者は約 74 歳と推計されている。服薬の継続により血液中の HIV を検出限界値以下にできる。その状態が半年以上継続すると、他の人に HIV を感染させることもなくなる。このように HIV をめぐる医学的状況は、劇的な変化を遂げた。

しかし、偏見は根強い。加藤さんは感染がわかった後、会社の直属の上司に話したことで、部長から呼び出され退社をうながされた。弁護士に相談し不当解雇として闘うことを決意し、それを伝えたところ、部署異動になった。だが、窓際のパーティションで区切られた場所での仕事で、やることもあまりない状況に置かれ、職場を辞めることに。

多くの HIV 陽性者は職場では話していない、と加藤さんは語る。今も HIV への理解が広がっていないからだ。また HIV はセクシュアリティと大きく関わる問題だが、学校でのセクシュアリティに関する教育、情報が不足していることの指摘もあった。

ふれいす東京では、相談事業 (総合ライン、陽性者や陽性者の身の回りの人向けライン、ゲイ・バイセクシュアル男性向けライン)のほか、予防啓発、直接支援、研究/研修の事業をおこなっている。様々な属性ごとの陽性者ミーティングも開催している。

参加者の声

- ◎当事者の方の口から直接経験したこと、感じたことを聞くことができたことがとてもよかった。感染告知を受けた後誰にどのように、いつ伝えるのか/伝えないのか、伝えるメリットやデメリットは何か、という話が印象に残った。昔と HIV に対する感覚や向き合い方が変わっていることから今後どのように、特に若い世代に検査について考えてもらいたいか、自分ごとのように感じた。
- ◎セクシュアルマイノリティには前から興味があったが、HIV についての深い知識はなかったもので、勉強になった。

サポート学生

渡邊 咲良 (社会学科 2 年)



写真は語る ～ STAND Still 写真展からみる非言語表現がもたらすもの～

フォトジャーナリスト／Picture This Japan 大藪 順子

2022年12月7日(水) 15:15～16:45

ボランティアセンター（横浜）コラボレーションスペース

参加者：8名（学生2名、Stand Still 2名、職員3名、他1名）

＊連動企画：「性暴力サバイバー ビジュアルボイス写真展」

2022年12月7日～14日、会場：クララ・ラウンジ

内容

大藪さんはアメリカに留学して、新聞社で専属写真家として勤務していた時に、自宅で性暴力の被害にあった。それまで事件の被写体であった姿が自分に起こるとは考えたことがなかったという。そこから友人やカウンセラー、教会の牧師など様々な人たちの助けを得て立ち上がり、サバイバーたちを訪ねて写真を撮るようになった。さらに、自分が写真で代弁をするのではなく、サバイバー自身が主体となるためのサバイバー自身による写真プロジェクトを開始した。

日本に帰国してからは、川崎で起きた殺人事件をきっかけに、居場所を失った外国につながる子どもたちによる写真プロジェクトも行っている。

ボラカフェでは、実際にサバイバーや子どもたちの撮った写真を見ながら、その背景について解説があった。講演後、参加者を2つのグループに分けて、大藪さんのお話から感じたことや印象に残った言葉を共有した。その後全体で共有し、質疑応答を行った。

参加者の声

- ◎写真で自分の気持ちを表現することが出来ると同時に社会に向けて課題の提示ができる。
- ◎もっとこのイベントについて、広く周知したらいいと思う。
- ◎ビジュアルボイス、という表現方法を初めて知った。これまで声を上げられない人が声をあげられるようにすることが大事だと思っていたが、それは必ずしも言葉である必要がなく、むしろ多様な表現方法によって可能性が広がるのだということが分かった。



9. 国際機関実務体験プログラム

(1) 総括

国際機関実務体験プログラムは、横浜・みなとみらい地区の国際機関で45時間から100時間の実務体験を行う、公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）と本学を含めた6大学との協働事業である。

国際協力や国際交流の実務を体験することにより、大学で修得した学問と実務機関での実践の融合をはかり、将来、国際性豊かな資質を持って世界的な問題を視野に入れて活動することができる人材育成を目的とする。

実務体験は、夏期と春期に行われ、派遣国際機関は6大学で割り振られている。2020年度、2021年度は新型コロナウイルス感染症の影響により夏期・春期ともに中止となったが、2022年度の春期から再開となり、1名が公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）にて実務体験を行い、無事にプログラムを修了した。

約2年ぶりの実施であったため、学生、国際機関、大学共に感染対策を講じつつ、オンラインと対面を併用しながらの新しい形でプログラムを展開し、充実した内容になったと感じている。多岐に渡る事業の中から、学生自身の学びや目標に関連する研修内容を組み立てていき、先方へのアポイントも自ら取ったうえで訪問するなど、学生にとって自主性を育てる貴重な機会となった。最終報告会では、学生自身の大学での学びや視野をさらに広げてくれる出会いや学びを経験したことがよく分かり、次への目標がさらに明確になった印象を受けた。今後の更なる活躍に期待したい。

（職員 杉山 佳奈）

◇ 2022年度春期プログラム実績

派遣人数	1名
派遣先	公益財団法人 横浜市国際交流協会（YOKE）
活動内容	・YOKEが運営する各ラウンジ（なか国際交流ラウンジ、鶴見国際交流ラウンジ）や、横浜市国際学生会館への訪問 ・多文化共生推進事業（通訳ボランティアのための講座等）への参加 ・YOKEの活動発信のための動画作成プロジェクト ・中間、および最終報告会での活動報告

(2) 派遣学生活動報告

1. 派遣学生	文学部英文学科 2年 西坂 里衣那 ※学年は派遣当時
2. 実務体験先機関	公益財団法人横浜市国際交流協会 (YOKE)
3. 志望動機	過去に経験したボランティアで、日本に暮らす外国人がひっそりとくらししているような印象を受け、多文化共生を実現していくために YOKE ではどのような取り組みを行っているか学びたいと考えました。また、学校教育のなかで多文化共生・異文化理解を深めるためのヒントを学びたいと考えたからです。
4. 実習テーマ・達成度	実習テーマ(興味・関心の中心、重視したこと、特に注力したいことなど) 多文化共生のために学校教育ができること ・外国に繋がる児童・生徒に対してできること ・学級・学校に対して行えること 達成度(実習を振り返って) 出前授業に同行したり、ラウンジや学生会館などの職員からお話を聞いたりすることで、学校でできること、地域と協力することなどを学ぶことができました。
5. 実務体験内容	スケジュール、内容等 ・みなみ市民活動・多文化共生ラウンジ ：学校を核にした多文化共生事業、多文化体験会参加 ・YOKE の事業 ：通訳ボランティアスキルアップ講座、多文化共生講座、ysf-SDGs の補助 ・ラウンジ×地域 ：「ヴェネツィアの魅力」(多文化講座)、多文化体験会への参加 ・横浜市国際学生会館 ：留学生による出前事業の見学
6. 学び・気づき	新たに学んだこと 学校での学びは、子どもだけでなくその保護者の学びにも繋がるということです。特に出前授業では、実際に地域の外国人講師の方が授業を行います。日本人には知り得ない外国の文化や風習などを学ぶ機会になります。学校での子どもの学びが保護者に伝わり、異文化に対する理解が深まるという役割を担うことを学びました。 実習前と実習後の変化 多文化共生に対する認識の仕方が変化しました。実習前は、日本での多文化共生には日本語教育や外国語に長けている人材が必要だと考えていました。実習を通じて、多文化共生は「共存」ではなく「自分らしくいられること」だと考えるようになりました。それぞれが持つ文化や風習を守りつつ、一市民として一緒に暮らすための支援が必要だとわかりました。自分事として考え、行動しようという気持ちを持てるようになったと考えます。 実習によって得た知識やスキルなど 1つ目は、やさしい日本語の活用法です。日本に暮らす外国人は、懸命に日本語を話そうとしてくれます。完結で、理解しやすい方法で表現することでコミュニケーションの幅が広がるということを学びました。2つ目は交渉力、行動力が向上したことです。本実習は自分でルールを引かなければなりませんでした。自分のやりたいことと実際にできることを考慮して行動できるようになったと感じています。

7. 特に印象に残ったこと	横浜市国際学生会館：就職体験報告会・留学生による出前授業 準備や片付けやイベントを通して、たくさんの施設の職員の方々や留学生、ボランティアの方々と交流ができたからです。職員の方々から、潮田地区の歴史や多文化共生の取り組みについてお話を聞くことができました。また、様々な国から来日した留学生とコミュニケーションをとることができました。その際、留学生活や自国の文化、将来についてなど貴重なお話を聞くことができました。新しい考え方に触れ、多文化共生の取り組みや苦労などを学ぶことができたので、印象に残っています。
8. 課題・改善点	今回のインターンシップは、学びをデザインするために、計画を立てたり、アポイントメントをとったりしました。優先順位を付けたり、必要なものを取捨選択したり、とても貴重な経験を積むことができました。もともと計画的に行動することが苦手で、実務体験を通じて改善されてきたと感じていますが、まだその力は足りないと改めて実感しました。振り返る時間を設けることで、計画性の向上に繋がるのではないかと考えています。
9. 今後へ向けて	地元で教員となり、学校と地域社会との連携を通じて多文化共生の実現に貢献したいです。また、英語の教師として、グローバル化における英語学習の重要性を伝えたいです。残りの大学生活では、多文化共生に対する理解、英語力の向上に努め、多文化共生のために自分には何ができるのか考えを深めたいです。
10. プログラム風景	 横浜市国際学生会館 OB・OG 会  みなみ市民活動・多文化共生ラウンジ 学校を核にした多文化共生事業

Ⅲ. 新入生アンケート

新入生のボランティア意識とセンターの課題 —「2022 年度新入生ボランティア活動アンケート」

1. アンケートの実施方法と回答者数

ボランティアセンターでは、2001 年度から毎年 4 月に新入生にボランティアへの意識などを把握するためのアンケートを実施している。開始当初から 2019 年度までは、学科ガイダンス時に対面でアンケートを実施してきた。しかし、新型コロナウイルスの蔓延により 2020 年度はアンケートを実施できなかった。そして 2021 年度と 2022 年度はポートヘボンのアンケート機能を利用した Web アンケートとなった。

対面で実施していた例年のアンケートでは全入学者のうち 90% ほどが回答し、2,500 人前後の回答を得ている。しかし、2021 年度は Web アンケートの最初の年ということもあり、回答率が 6.4% と例年と比べて 1 割以下となってしまった。2022 年度も同様に Web アンケートだったが、回答人数 1,071 人で回答率 34.2% と例年の 4 割程度まで回復させることができています。

本稿では、2022 年度と例年のアンケート回答を比較しながら新入生のボランティア意識とセンターの課題について述べていく。ただし、2021 年度および 2022 年度は先に述べたように例年に比べて回答者が少ない。そのため、ボランティアに関心が高い学生やアンケート回答などに積極的に協力する学生に偏っていることが考えられる。この点に注意したうえで考察していく。

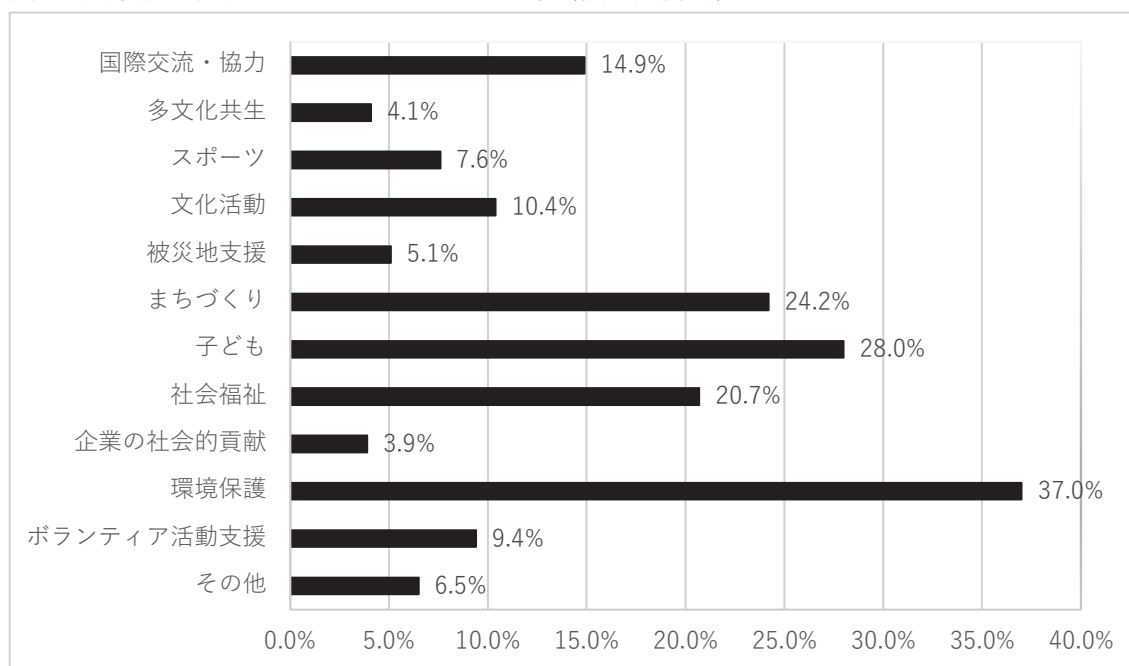
2. 大学入学前のボランティア活動

2022 年度新入生の大学入学前のボランティア活動への参加については、参加経験のある人が 52.8% (565 人)、ない人が 47.1% (504 人) である。2021 年度は参加経験のある人が 53.9% であり、比較すると減少している。これは、2021 年度のアンケートでは回答数が非常に少なく、回答者がボランティアに興味関心が高い人に偏っていたことが影響していると考えられる。実際、2018 年度では 44.5%、2019 年度では 47.9% であり、入学前にボランティア活動をする学生が年々増えている傾向が見られる。

参加経験がある 565 人に、「参加したことがあるボランティアの分野（複数回答可）」を聞いた。この回答について、参加経験がある 565 人を母数として、各分野の割合を図 1 にまとめた。例年の傾向として「子ども」、「社会福祉」、「環境保護」と「まちづくり」の 4 分野への参加経験が多くなっているが、2022 年度はその中でも「環境保護」が特に多かった。近年は SDGs や ESG などのワードが社会的な課題として注目されていることなどが影響して考えられるだろう。

どのような経緯でボランティア活動に参加したかについては、「学校の行事として参加した」が 40.5% (236 人)、「自分から興味があって参加」が 33.1% (193 人)、「どちらの場合もあった」が 26.4% (154 人) であった。

図1 入学前に参加したボランティアの分野（複数回答可）



3. ボランティア活動に対する関心

「ボランティア活動を通して学ぶことに興味がありますか」という問いについて、経年のデータを図2にまとめた。2021年度に比べると2022年度はボランティア活動を通して学ぶことに興味のある学生の割合が大幅に減少しているように見えるが、これは2021年度の回答者が偏っていた影響だろう。実際、これまでの例年の傾向としては「大いに興味がある」と「ある」を合わせた割合は70%前後で推移している。それと比べると2022年度は興味がある学生の割合が8割以上と例年の平均と比べて1割近く高いことがわかる。

また、「ボランティアに関するニュースに興味がありますか」と聞いたところ、「大いに興味がある」が15.7%（168人）、「興味がある」が48.8%（523人）、「どちらともいえない」25.7%（275人）であった。例年と同じ傾向だが、「ボランティア活動を通して学ぶこと」に比べてニュースへの関心では、中間的な回答が多くなる。

次に、ボランティア活動の中で、新入生がどういった分野に興味を持っているのか、みていきたい。「どのようなボランティア活動に興味がありますか（複数回答可）」と聞いてみた。その結果について、母数を回答者数の1,071名として、それぞれの分野に興味を持っている人の割合を図3にまとめた。

入学前に実際に参加したボランティアでは「環境保護」が最も多かったが、興味関心の先は多岐に渡っている。その中でも「国際交流・協力」や「多文化共生」などのグローバル化に関連した項目への関心が多くなっている。また、「子ども」も40%以上の学生が興味を持った分野となっている。

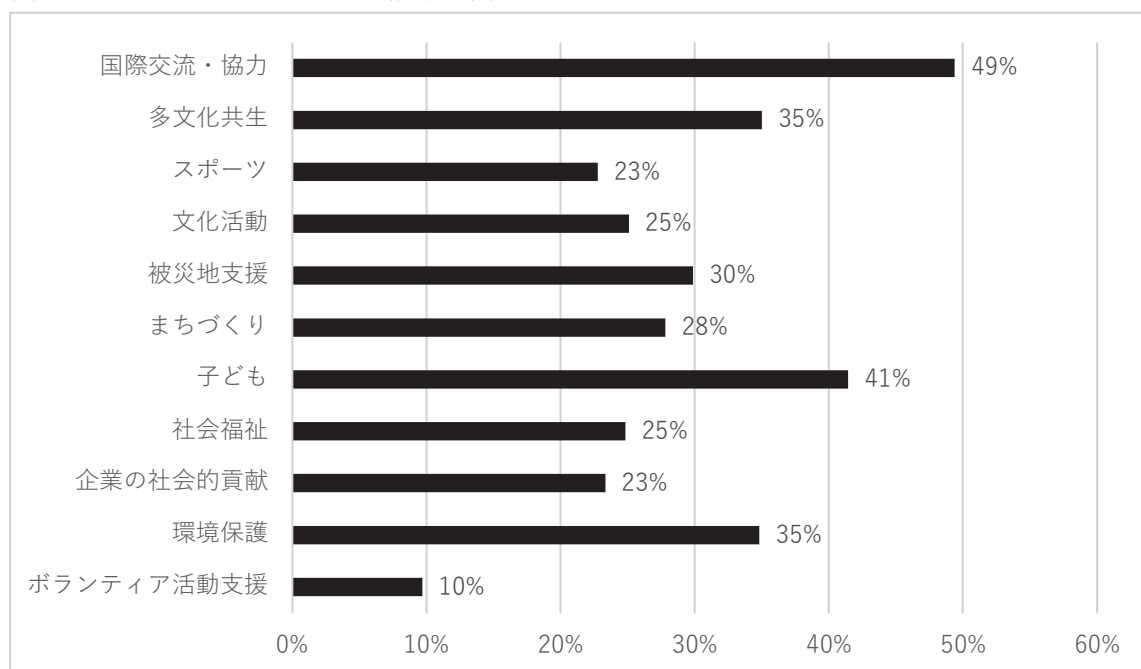
また、図3で記載していないが、その他の分野として、「動物保護」や「ホームレス支援」、「貧困や差別への貢献」などを挙げる人もいた。大学だからこそできるボランティア活動も多

いだろう。ボランティアセンターとしては、学生に向けて幅広い分野のボランティアに関する情報発信や、多様なボランティアに取り組めるようサポートをしていきたい。

図2 ボランティア活動を通して学ぶことに興味がありますか

	2017		2018		2019		2021		2022 (今年度)	
	回答 者数	割合 (%)	回答 者数	割合 (%)	回答 者数	割合 (%)	回答 者数	割合 (%)	回答 者数	割合 (%)
大いに興味がある	581	20.4	527	19.4	445	19.1	86	45.0	341	31.8
ある	1,511	53.0	1,320	48.7	1,198	51.5	91	47.6	534	49.9
どちらともいえない	588	20.6	645	23.8	548	23.6	8	4.2	140	13.1
あまりない	135	4.7	167	6.2	103	4.4	3	1.6	35	3.3
全くない	24	0.8	41	1.5	25	1.1	1	0.5	8	0.7
未回答	10	0.4	11	0.4	6	0.3	2	1.0	13	1.2
全体	2,849	100.0	2,711	100.0	2,325	100.0	191	100.0	1,071	100.0

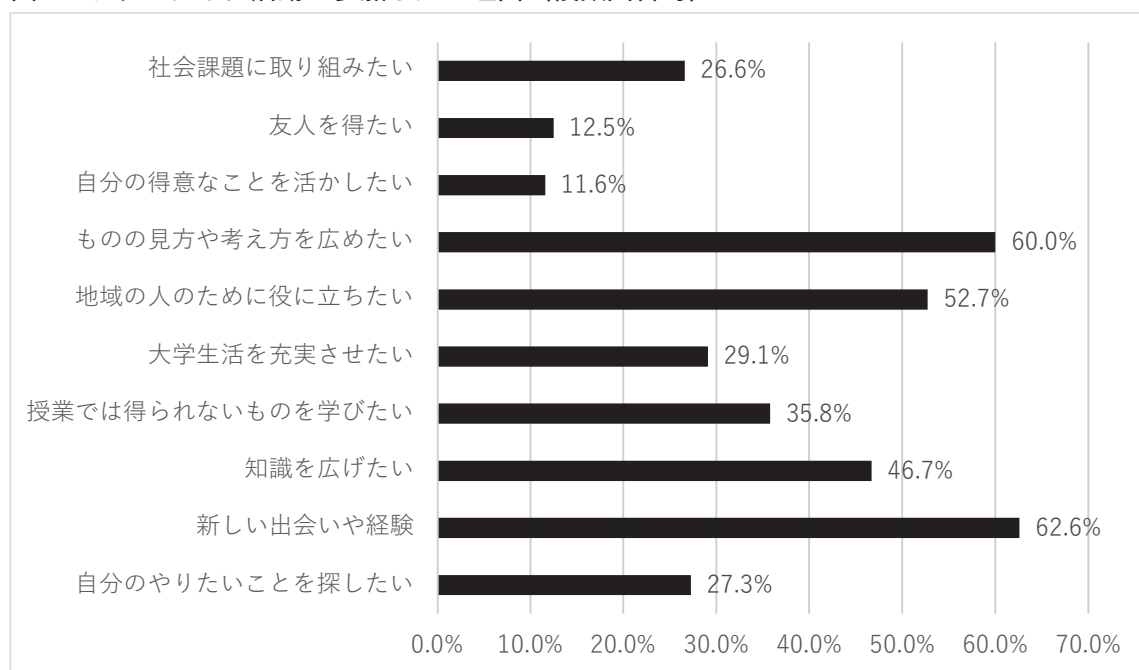
図3 どのようなボランティア活動に関心があるか



4. 大学でのボランティア活動

「大学時代にボランティア活動に参加したいですか」と聞いたところ、「参加したい」が 82.2% (880 人)、「いいえ」が 17.2% (184 人)、未回答が 0.7% (7 人) であった。加えて、「参加したい」と回答した 880 人に、「ボランティア活動に参加したい理由について教えてください（複数回答可）」と聞いた。その結果について、母数を参加したい 880 人としてそれぞれの項目の割合を図 4 にまとめた。

図 4 ボランティア活動に参加したい理由（複数回答可）



例年の傾向として「新しい出会いや経験」が 60% 前後で高くなっているが、今年度も 62.6% と参加したい理由の第一位となっている。これに加えて、「ものの見方や考え方を広めたい」(60.0%) や「知識を広げたい」(46.7%) などの「自己実現型」の項目が高くなっているのも例年の傾向と同じである。それと比べると「地域の人のために役に立ちたい」(52.7%) や「社会課題に取り組みたい」(26.6%) などの「問題解決型」の動機は相対的に少なくなっている。例年も同様の傾向となっているがボランティアセンターとしては、こういった「問題解決型」の動機を持つ学生が多くなるように、外部や新入生に向けて情報発信を続けていきたい。

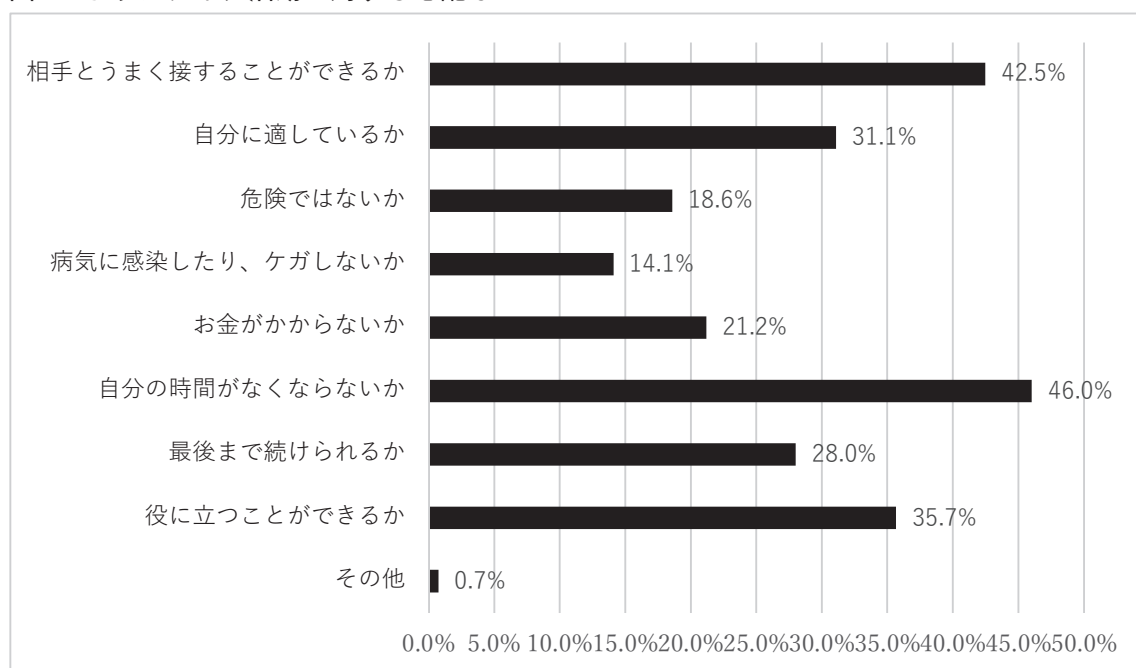
「どのようなスタイルでボランティア活動に参加したいですか。(複数回答可)」と聞いてみた。活動日については、「夏休み・冬休み等の長期休暇」と回答した人が 631 人 (71.7%) で最も多かった。また頻度については「月に 1 ～ 2 回くらい」が 306 人 (35.0%)、「2 ヶ月に 1 回くらい」が 290 人 (33.2%)、「一定期間に集中して」が 229 人 (26.2%) となっており、人によってこういった頻度がバラつきがでている。内容については「一つの活動を続けていきたい」が 106 人 (12.1%) に対して、「色々な活動に挑戦していきたい」が 767 人 (87.7%) となっている。色々な活動に挑戦したい学生に適した「1 Day for Others」などのプログラムの周知が重要と

なってくるだろう。

5. ボランティア活動に関して心配なこと

ボランティアセンターとしては、学生がボランティアに参加しやすい環境づくりをしていきたい。そこで、「ボランティア活動に対する心配なことはなんですか（複数回答可）」と聞いている。母数をアンケート回答者1,071人として、それぞれの項目について割合を図5にまとめた。

図5 ボランティア活動に対する心配なこと



「相手とうまく接することができるか」(42.5%)、「自分に適しているか」(31.1%)、「役に立つことができるか」(35.7%) など、ボランティア活動を上手にできるかどうかに関する不安を多くの人が持っていることがわかる。実際、「その他」の自由記述でも「大きなお世話、迷惑にならないか」との回答があった。また、「自分の時間がなくなるか」、「お金がかからないか」や「危険ではないか」など、自分のリソースがボランティア活動に割かれてしまうことやボランティア活動でのリスクを懸念している人も多い。自由記述では、「自分の体調に影響しないか」や「コロナへの感染懸念」などの回答があった。こうした不安を払拭できるように学生のボランティア活動をサポートしていきたい。

6. 明治学院大学のボランティア活動

最後に、「1 Day for Others」や「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」などの明治学院大学のボランティアについて論じていきたい。「明治学院のボランティア活動について知っていましたか」と聞いたところ、「はい」が48.6% (521人)、「いいえ」が51.0% (546人)であった。また、「はい」と回答した人に「どのように明治学院大

学のボランティア活動を知りましたか（複数回答可）」と聞いたところ、「大学のホームページ」と回答した人が一番多く 86.3%（450 人）、「オープンキャンパス」20.1%（105 人）、「SNS」7.6%（54 人）と続いた。SNS での情報発信が学生や外部の人たちに届くようにすることは今後の課題と考えられる。

1 日社会貢献プログラムの「1 Day for Others」は、これまでにボランティアを経験したことがない新入生にとっては比較的参加のしやすい機会だ。一方で、「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」は、3 年間かけて修了するプログラムであり、ボランティア実践と大学での学びを結びつけながら腰を据えて取り組みたい学生にとって魅力あるプログラムである。「1 Day for Others に参加してみようと思いますか」、「明治学院大学教育連携ボランティア・サティフィケート・プログラムに参加してみようと思いますか」とそれぞれ新入生に聞いた結果を図 6 にまとめた。

図 6 明治学院大学のボランティアプログラムに参加したいか

	1 Day for Others		ボランティア・サティフィケート・プログラム	
	回答者数	割合（％）	回答者数	割合（％）
参加する	100	9.3%	45	4.2%
できれば参加したい	392	36.6%	277	25.9%
内容を確認してから参加を考える	538	50.2%	668	62.4%
参加しない	35	3.3%	76	7.1%
未回答	6	0.6%	5	0.5%
全体	1,071	100.0%	1,071	100%

例年みられる傾向だが「1 Day for Others」と「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」では「参加する」と「できれば参加する」の学生数は「1 Day for Others」の方が多くなっている。そして、どちらのプログラムについても「内容を確認してから参加を考える」と回答している人の割合がかなり多い。プログラムの魅力を新入生に伝えていくことが非常に重要になってくるだろう。

（ボランティアセンター長補佐 岡本 実哲）

IV. ボランティアセンター資料

1. ボランティアセンターの活動にご協力くださった皆さま

- ・ 明治学院大学グリーン・リーヴス OB 会合唱団
- ・ 明治学院大学校友会
- ・ 明治学院大学保証人会
- ・ 明治学院同窓会ウィメンズクラブ「くらら会」

2. 2022 年度マスコミ報道一覧

日付	媒体名	内容
11 月 5 日	読売新聞岐阜版	明治学院大学ボランティアサークル「OPEN ROOM」 やっと会えた 直接交流 下呂・茂原小 大学生と支援学級児童 (いつでもボランティアチャレンジ助成企画：P.59 参照)
11 月 12 日	岐阜新聞飛騨版	明治学院大学ボランティアサークル「OPEN ROOM」 明治学院大生と交流 竹原小特支学級 児童、ゲーム楽しむ (いつでもボランティアチャレンジ助成企画：P.59 参照)

3. 2022 年度各種委員等一覧

(1) ボランティアセンター運営委員

永野 茂洋 (副学長)【委員長】
小椋 道晃 (文学部)
齋藤 弘樹 (経済学部)
三輪 清子 (社会学部)
西村 万里子 (法学部)
坂本 隆幸 (国際学部)
清水 美紀 (心理学部)
篠崎 美生子 (教養教育センター)
坂口 緑 (宗教部長)
小林 潤一郎 (教務部長)
宮本 聡介 (学生部長)
武村 美津代 (事務局長)
猪瀬 浩平 (センター長)
林 公則 (センター長補佐)
岡本 実哲 (センター長補佐)
磯野 昌子 (ボランティアコーディネーター)
菅沼 彰宏 (ボランティアコーディネーター)
砂川 秀樹 (ボランティアコーディネーター)

(2) ボランティア活動推進委員

猪瀬 浩平 (センター長)
林 公則 (センター長補佐)
岡本 実哲 (センター長補佐)
磯野 昌子 (ボランティアコーディネーター)
菅沼 彰宏 (ボランティアコーディネーター)
砂川 秀樹 (ボランティアコーディネーター)

(3) ボランティアセンタースタッフ

猪瀬 浩平 (センター長)
林 公則 (センター長補佐)
岡本 実哲 (センター長補佐)
高橋 千尋 (次長兼課長)
磯野 昌子 (ボランティアコーディネーター)
菅沼 彰宏 (ボランティアコーディネーター)
砂川 秀樹 (ボランティアコーディネーター)
菊池 範子
青木 洋治
杉山 佳奈
近藤 なつみ
永島 莉沙

4. ボランティアセンター 2022 年度基本方針

ボランティアとは、人びとが、小さい声、弱い声に耳を傾け、大きな力に頼ることなく、この世界を、他者と共に生きるために自ら行うはたらきである。あらゆる職業、研究・学習、日常生活の中にボランティア・スピリッツは存在している。社会生活の多様な場面で他者への貢献を考えることのできる人格形成を行うことが、本学の教育理念である。

この教育理念を具現化するために、ボランティアセンターは、学内外のあらゆる関係者が「他者への貢献」について考え、実践し、交流する場を提供する。それによって、一人一人が社会課題と出会い、向き合い、共に考えるなかで、自分が変わり、誰もが生きやすい方へ社会を変えていくことを目指す。

2022 年度は、授業の対面化が進む状況を受けて、ボランティアセンターの人と人、人と現場とをつなげる役割の充実を図る。ボランティアセンターにいけば、社会課題に向きあう学生や、専門的知識・経験をもったスタッフと出会い、自分の世界が広がる。実際に活動するためのアイデアを膨らませ、一緒に活動する仲間や、アドバイスや協力してくれる人々、活動を支える様々な資源を知る。活動のなかで生まれた悩みや問題に向き合い、それを乗り越えるための力を手に入れる。そんなことができる場として、ボランティアセンターで活動する学生が生み出す活動の幅を広げていく。あわせて、コロナ禍で広がったオンラインによる活動や、支援方法を有効に活用しながら、空間に捉われない、柔軟な活動や支援の在り方も引き続き探っていく。そして、新型コロナウイルス感染症によって生じた社会課題のみならず、国内外の様々な社会課題に向き合い、その解決のための方策を探る学生たちを支え、その成長を後押しすることに力を入れる。

そのための方策として、以下の4点を2022年度の基本方針とする。

1. 本学学生、教職員全員のボランティア活動への参加促進と支援

ボランティア活動への参加を促進し、積極的に支援するための方策として、以下の4点を行う。

① 社会課題に出会う場の提供。「1 Day for Others」や「ボランティアカフェ」の実施。

「1 Day for Others」については、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえながら、対面、オンラインを適宜使い分け、一つひとつのプログラムの質の向上を図る。教職員・学外協力者と連携したプログラムの創生を引き続き行うとともに、協力者を拡大するための「1Day 作り方マニュアル」を準備する。

② 「社会課題に出会い・向き合う場」の提供。

「いつボラ」、「ボラチャレ」、外部資金調達等による活動を促進する。いずれの活動も、留学生など活用する学生の幅を広げるとともに、学生＋教職員、教職員のみなど多彩な組み合わせによるボランティア活動が生まれることを視野に入れ、広報を行うとともに、活動を具体化するため企画段階から支援を行う。

③ 学生による学生支援の展開を促進する。

そのために、学生自らがボランティア活動を活性化、支援するための組織作りを模索する。ボランティアセンターの教職員スタッフだけでなく、学生自身が議論に参加し、ボランティアセンターの場としての充実や、学生による学生の支援の方法を考える。また、ボランティア・サティフィケイトの上級生による下級生の支援をさらに充実させる。

④ 教職員との協働を一層深めていくために、運営委員・活動推進委員と緊密に連携するとともに、授業や研究への支援や、ボランティア・市民活動についての情報提供を積極的に行う。同時にボランティア・市民活動にかかわる研究・教育・実践を行っている教職員の情報を収集し、ボランティアに関わる情報の共有や、ボランティアセンターの事業への助言を受けるなど、連携を図っていく。

2. ボランティア実践と大学の学びの融合の活性化

明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラムを「社会課題に向き合い、考え、自分が変わる・社会を変える場」と位置づけ、さらに充実させる。そのため、ボランティア活動の一層の深化を目指した支援に加え、最終報告書に学部独自性を活かし、学びの深化が見えることを目指した仕組みづくりを行う。サティフィケイト修了学生が、学習・実践をさらに発展させる場として、ボランティア大賞にチャレンジするなど、サティフィケイトを修了した学生・卒業生が学びの成果を共有する場を広げていく。

3. ボランティアセンターの交流・活動・研究の場としての機能の充実

新型コロナウイルスの感染対策にも十分留意しながら、センターの以下の4つの機能を、対面・オンラインの両面で担えるよう、スタッフの専門的知識を高め、一層の充実を図る。

① 学生のボランティア活動支援機能

- ・活動の作業・ミーティングスペースの提供、収納など場としての活用を図る

② 教員との連携機能

- ・正課の授業支援や教員の研究支援を通してボランティアセンターの活用を促進する
- ・ボランティアや社会課題に関わる教員の教育・研究内容を提供いただく講座等の企画

③ 学内外の情報発信機能

- ・学内のボランティア活動情報や、団体登録を経た学外団体・機関からのボランティア情報を提供する

④ 本学のボランティアを深化させるための研究機能

4. ボランティアセンターにおける活動の発信・広報の強化

社会に対する説明責任を果たし、活動を活性化するために、学内他部署と連携しながら、ボランティアセンターの活動について、ホームページ、SNS、映像、リーフレット、報告書オープンキャンパスなどを利用して広く情報を発信する。

5. 明治学院大学ボランティアセンター規程

2001 年 7 月 18 日	大学評議会承認
2004 年 5 月 19 日	大学評議会承認
2004 年 10 月 20 日	大学評議会承認
2005 年 10 月 7 日	常務理事会承認
2005 年 12 月 9 日	常務理事会承認
2006 年 1 月 13 日	常務理事会承認
2006 年 7 月 14 日	常務理事会承認
2010 年 3 月 12 日	常務理事会承認
2014 年 3 月 14 日	常務理事会承認
2018 年 5 月 11 日	常務理事会承認

(設置)

第1条 明治学院大学（以下、「本学」という。）に明治学院大学ボランティアセンター（以下「センター」という。）を置く。

(目的)

第2条 センターは、共通教育機関として、「他者への貢献」(Do for Others)の精神にのっとり、ボランティア活動を通じた人間教育を行うことを以て目的とする。

(業務)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、以下の業務を行う。

- (1) サービス・ラーニングプログラムの企画、実施
- (2) 学生等に対するボランティアの立ち上げなど、学生の自主的活動の支援と助言
- (3) 地域や国際社会への貢献を目指し、社会との協働によるボランティアプログラムの開発
- (4) 学内外のボランティア活動に関する情報収集と学生への提供及び相談への対応
- (5) 教職員への情報提供とボランティア活動参加に関する機会提供
- (6) 本学におけるボランティア関連科目に関する協力
- (7) その他、学生等のボランティア活動の促進に必要な業務

(活動)

第4条 センターは、第2条の目的を達成するため、以下の学生の活動を支援する。

- (1) キャンパス周辺の地域に貢献する活動
- (2) ボランティア入門プログラムに伴う活動
- (3) 地震、津波、台風、洪水など自然災害に伴う被災地支援活動
- (4) 海外でのボランティア等に関する活動
- (5) 学外の人道支援機関、特定非営利活動法人（NPO）、企業等との連携活動
- (6) ボランティア参加への啓発活動
- (7) その他

(運営委員会規程)

第5条 センターの組織および運営に関する重要事項を審議するため、明治学院大学ボランティアセンター運営委員会を置く。

2 センター運営委員会規程は、これを別に定める。

(構成)

第6条 センターには次の職員を置くことができる。

- (1) センター長 1名
- (2) センター長補佐 若干名
- (3) ボランティアコーディネーター 若干名
- (4) 非常勤ボランティアコーディネーター 若干名
- (5) 事務職員 若干名

(センター長)

第7条 センター長は本学専任教員の中から、学長が任命する。その任期は2年とし、再任を妨げない。

2 センター長は、センターの業務を統括する。

(センター長補佐)

第8条 センター長補佐は、本学専任教員の中から、センター長の推薦に基づき学長が任命する。その任期は2年とし、再任を妨げない。

2 センター長補佐は、センター長の業務を補佐する。

(ボランティアコーディネーター)

第9条 ボランティアコーディネーターの任用等は、「ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。

2 非常勤ボランティアコーディネーターの任用等は、「非常勤ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。

(評価・評価委員会)

第10条 ボランティアコーディネーターは、契約更新時にセンター長の設置する評価委員会による評価を受ける。センター長は、その結果を学長に報告する。

2 非常勤ボランティアコーディネーターは、契約更新時にセンター長が設置する評価委員会による評価を受ける。センター長はその結果を学長に報告する。

3 前2項に基づき設置する評価委員会は、副学長、学生部長、センター長、センター長補佐、大学事務局長、その他センター長が指名し運営委員会の承認を得た者から構成する。

(活動推進委員会)

第11条 センターに、その事業の円滑な遂行を図るためボランティア活動推進委員会(以下「推進委員会」という。)を置く。

2 推進委員会は、センター長の諮問に応じて助言または提案を行い、推進委員によって構成される。

3 前項の推進委員は、ボランティア活動に識見を有する専任教職員、学生等、およびボランティア活動についての学外の有識者・実務家(若干名)からなり、その任期は2年とし、再任を

妨げない。専任教職員にあっては、所属長の推薦により、その他の者にあっては運営委員会の議を経て、センター長が委嘱する。

4 センター長は、必要に応じて推進委員以外の者を陪席させることができる。

(学生メンバー)

第12条 センターの業務の遂行にあたって、センター長は、学生の参加と協力を求めることができる。

(規程の改廃)

第13条 本規程の改廃は、センター運営委員会の議を経て大学評議会および常務理事会の承認を得なければならない。

付 則

- 1 この規程は、2001年7月18日から施行する。
- 2 この規程の施行により、「明治学院大学ボランティア・センター暫定規程」は廃止する。
- 3 2002年4月1日一部改正施行（第3条第2項、教養教育センター設置による。）
- 4 2004年4月1日一部改正施行（第3条法務職研究科設置および委員にセンター長補佐追加による。）
- 5 2004年8月1日一部改正施行（第4条ボランティア・コーディネーター、事務職員数の変更による。）
- 6 2005年11月1日一部改正施行（第7条ボランティア・コーディネーター任用等に関する規程の新設による。第8条評価・評価委員会、新設）
- 7 2006年1月1日一部改正施行（コーディネーターを運営委員会委員とする。非常勤コーディネーターを新設する。）
- 8 2006年1月1日一部改正施行（第7条2項非常勤ボランティア・コーディネーター任用等に関する規程の新設による。）
- 9 2006年4月1日一部改正施行（第3条事務局職制変更による）
- 10 2010年4月1日一部改正施行（基本理念作成委員会の答申に基づき、第2条目的および第3条業務を見直し、第4条運営委員会規程を別途新設し本規程から削除、第5条センター長補佐の人数を変更、第7条センター長補佐は専任教員の中から選する、第9条2項に非常勤ボランティアコーディネーターの評価を明記、3項の評価委員会構成メンバーにセンター長補佐を追加、第10条4項推進委員会参加メンバーを弾力化する条文を追加）。
- 11 この規程は、2014年4月1日から施行する。（第3条3項、第4条学生の活動内容の追加、第5条3項の削除、第11条2項、第11条3項推進委員の学外有識者・実務家を2名から若干名へ変更、第12条見出し変更）
- 12 この規程は、2018年5月11日から施行する。（第6条ボランティアコーディネーターの人数変更、第10条評価を受ける周期の変更）

明治学院大学ボランティアセンター報告書 第19号 2022

発 行 2023 年 6 月

発 行 者 明治学院大学ボランティアセンター

〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37

明治学院大学白金キャンパス 10 号館 1F

TEL 03-5421-5131 FAX 03-5421-5144

〒244-8539 神奈川県横浜市戸塚区上倉田町 1518

明治学院大学横浜キャンパス 4 号館 1F

TEL・FAX 045-863-2056

E-mail voluntee@mail.meijigakuin.ac.jp

<https://www.meijigakuin.ac.jp/volunteeractivities>

印 刷 山口北州印刷株式会社

本報告書の一部または全部を無断で複製、転載、販売、
ネットワークにより転送することを禁じます。

